

# 慈濟

ものがたり

ツーチー 2019年9月 273





● 表見返し 文・證嚴法師 訳・済運 撮影・蕭耀華

## 慈濟の歩み

あの年を忘れるべからず：時代を検証し、歴史を書く。

あの人たちを忘れるべからず：

道を切り開き、広く福田を耕す。

あの一念を忘れるべからず：

志を頑なに守り、初心を持ち続ける。

縁を大切にし、良能を善用する。

時間を無駄にせず、広く実践し、この世に愛を広める。

# 目次

|      |        |      |   |
|------|--------|------|---|
| 【社論】 | 清浄は源から | 慈願／訳 | 4 |
|------|--------|------|---|

|        |                                                                  |                        |               |
|--------|------------------------------------------------------------------|------------------------|---------------|
| 【主題報道】 | 外国ごみの衝撃 資源をごみにするな<br>リサイクルセンターへの短い旅・<br>実情を見て心が震撼した<br>買い物袋の循環使用 | 有田夏子／訳<br>惟明／訳<br>済運／訳 | 8<br>28<br>40 |
|--------|------------------------------------------------------------------|------------------------|---------------|

|        |                              |       |    |
|--------|------------------------------|-------|----|
| 【国際慈善】 | 未知の旅路<br>セルビアを経由するシリア難民に寄り添う | 葉美娥／訳 | 49 |
|--------|------------------------------|-------|----|

## 表紙



慈済内湖環境保全教育センターのペットボトル分別エリアでは、ボランティアはペットボトルのキャップを外し、ボトルを色分け分別している。細かく分別して初めて、リサイクルできるようになる。いっぱい回収してくるボトルや缶は、現代人が消費生活に深く浸かっている証であり、環境に負荷をかけている。  
(撮影・黄筱哲)

|            |                                              |              |          |
|------------|----------------------------------------------|--------------|----------|
| 【證嚴法師のお諭し】 | 一分一秒たりとも無駄に過ごさない                             | 慈願／訳         | 66       |
| 【人物誌 屏東】   | 師と弟子との縁はこの世で円満に結ばれた                          | 明陞／訳         | 72       |
| 【近所のお友達】   | 山に囲まれ再び青春を生きる                                | 閻麗妮／訳        | 76       |
| 【納履足跡】     | 踏み出せば到達できる                                   | 済運／訳         | 86       |
| 【特別報道】     | 肉食から菜食へ<br>美味しさを顧客を引き止める<br>菜食の産後食・産婦も衆生をも護る | 本諦／訳<br>慈願／訳 | 90<br>98 |
| 慈済大事記【八月】  |                                              | 済運／訳         | 106      |

## 清浄は源から

「源から消費を抑えれば、廃棄物の運搬量を減らすことが出来ます。もし、それを使用するのであれば、回収する時に清潔でなければなりません。なぜなら回収とは『ゴミ』を集めるのではなく、資源を集めることであり、環境保全を進めるために、清浄は源からやらなければいけません」。

十年前、證嚴法師は「環境保全の精緻化と清浄は源から」と呼びかけた。廃棄物として処分する時には必ず洗浄し、正確に分別すれば、リサイクルステーションで処理する作業の効率が上がり、再利用しやすくなるのである。

慈済が環境保全を訴えてから三十年近くになる。しかし、その堅持も時代の障壁に当たったことがある。二〇一七年から一八年の末にかけて、中国が

何度も海外からの廃棄物の輸入禁止を発令した。その「外国ゴミ」禁止令によって国際間の廃棄物回収体系が変わってしまい、紙類、廃プラ等の回収価格が暴落すると共に、廃棄物は「行き場をなくし」、ゴミ危機をもたらした。

台湾は曾て回収率が五十五パーセントを記録し、米国の《ウォール・ストリート・ジャーナル》に「ゴミ処理の達人」と報じられたことがあるが、その当時の社会では、回収は無駄骨ではないか、と疑問視する声もあった。

本期の主題報道の分析によると、台湾の資源回収業者は価格の変動で痛手を受けることは確かだが、幸いにも慈済のリサイクルボランティアが一貫して細かく分別しているため、市場の変動による衝撃は比較的少ない。一部の回収物は市場から重要視されていないが、ボランティアは環境保全の信念に基いて、方針を変えず万難を排して分別し、無用のゴミの産出を抑えている。

アメリカ《ブルームバーグニュース》の記者アダム・ミンターの調査報道



では「回収、再生」はゴミ解決の方法としては三番目にしか数えられない。なぜなら処理の過程でもエネルギーを消費し、汚染を作り出すからである。そして、回収再生される回数に限りがあるため、回収率を上げるよりも根本からゴミの産出を抑える方がはやすい。

例えば、台湾のビニール袋の使用量は驚くほど多い。私たちの消費習慣を見るだけで分かる。特に街の至る所にある飲食店を利用すると、一人が一日に幾つものビニール袋を使ってしまうのだ。統計によると、台湾で一人当たり一年間に使うビニール袋は平均EJ加盟国の四倍近くになり、環境破壊の観点から見ても見ぬふりをしてはならないのである。

慈済は長年、外出の時には自前の買い物袋や携帯食器の持参を呼びかけてきた。現在、マイコップを持参すれば割引する店も増え、プラスチック製

コップの使用削減を後押ししている。数年前、数人の若者がユーバッグ (Your bag, my bag 中古バッグリサイクルプロジェクトー あなたのバッグ、私のバッグ) 団体を立ち上げ、家にある中古袋の寄付を人々に呼びかけた。初めはボランティアが洗浄してから加盟店に届け、消費者に再度使用して貰っていたが、今その団体は情報提供のプラットフォームとして、店舗や企業、団体を通してプラスチックの使用削減を呼びかけており、慈済青年公益実践計画にも参加している。

法師は、「人心を浄化してこそ大地は浄化される」と言っている。環境保全とは単に力を尽くして回収するだけではなく、物欲を抑える生活理念なのである。純朴な心だけが環境をより大きな破壊から守ることができるのである。

(慈済月刊六三二期より)





## 一 主題報道

# 外国ごみの衝撃

# 資源をごみにするな

二〇一八年「外国ごみ」が来襲し、リサイクル品の買取価格が暴落すると、プラスチックや紙の廃棄物が行き場を失って山積みになり、台湾のリサイクル体制が長年抱えてきた問題が浮き彫りになった。分別が不完全であるためにリサイクルを困難にし、資源をごみにしているという現状である。

廃棄物は増える一方で、ましてやこの地上から突然消えて無くなることもない。ごみとなるか、資源となるか、それはあなたがごみを捨てる瞬間に決まる。今この瞬間、楽な方を選べば、将来に大きな問題を先送りすることになる。





「**最** 近の買い取り価格は良くないよ、特に紙類は良くないね」。リサイクル業界について尋ねると、個人の廃品回収業者であれ、地域型の資源回収所であれ、ほぼ同様に、このように答える。

●紙類を取り扱う回収所では作業員がフォークリフトで紙とダンボールを分別する。台湾における年間の紙廃棄物の回収量は300万トン以上である。紙廃棄物の輸入がリサイクル市場に大きな影響を及ぼしている。

価格の暴落は、およそ二〇一八年初頭







テムに影響を与えた。西洋諸国の資源ごみ、すなわち「外国ごみ」が一度に行き場を失い、中国に隣接する東南アジア地域一帯、そして当然ながら台湾にも流入することになったのである。

こうして台湾へ押し寄せた固形廃棄物の大部分は、紙類とプラスチック類である。税関の統計によれば、二〇一八年上半期におけるプラスチック廃棄物の輸入量は約二十四万トンであり、前年同時期に比べると二・六倍増加した。また、紙廃棄物の輸入量は七十七万トンであり、前年同時期に比べると一・三倍増加している。

海外の廃棄物には、生活ごみが多く含まれており、台湾に環境汚染をもたらす



に始まった。それにとまって、個人の廃品回収業者から資源回収所へ送られる物資についても、厳しく検査されるようになった。以前は、ダンボール、古紙、飲料用紙パックをまとめて一緒に売ることができたが、最近は、それらが明確に分別されていなければ、買い取ってもらうことは難しい。

このような変化の原因は、実は国際情勢と密接な関係がある。中国は二〇一八年一月より、二十四種類の廃棄物の輸入を禁止した。その中には、生活ごみの混ざったプラスチック廃棄物や分別を経ていない紙の廃棄物も含まれている。中国による突然の禁止令は、世界中のリサイクルシス

●個人の廃品回収業者が資源ごみを回収所に運び込み、分別・計量していた。回収物は様々なルートで回収所に集められた後、分別を経て素材別の処理工場へ送られ、リサイクルされる。

恐れがある。また台湾のリサイクル市場や買取価格への影響力も無視できない。最も大きな影響を受ける紙類を例に取ると、二〇一七年には一キロあたり約五元（台湾ドル）であったのが、二〇一八年には一時的に一〜二元にまで下落した。

### 増え続ける頭痛の種

新北市新莊区にある資源回収所では、地面に回収品が山のように積まれている。それぞれの山は、金属、プラスチック、ペットボトル、紙類、家電製品など種類別に分かれている。紙類が一番多く、さらに細かく分別されている。一番小さ



## 外国ごみとは

欧米諸国が輸出する、生活ごみの混ざった固形廃棄物であり、その異物混入量は20%にもなる。中国が廃棄物制限令を発表したことで、外国ごみが他の発展途上国に向かうようになり、マレーシア、タイ、ベトナム等の国々も、次々と外国ごみの輸入を規制した。台湾は2018年10月より古紙やプラスチック廃棄物の異物混入率を0.5%以下に規制したが、クラフト紙、厚紙、再生紙、および単一素材プラスチック廃棄物は、産業用材料として今でも輸入が可能である。

な山になっているのは、比較的状态の良い紙のようである。

資源回収業を十年以上経営している邱さんによると、彼の経営する回収所は紙類を主に取り扱っており、古紙やダンボールの回収量で見れば、中程度の規模

といえる。そのため、外国ごみの影響は小さくなく、価格の下落により損失が出ているほか、売れ残ったものが山積みになり、頭が痛いという。「以前は製紙工場に五百トン売れたが、今は三百トンしか売れないよ。余った二百トンはここに

積んでおくしかないんだ」。

海外の紙廃棄物の価格が安くなると、製紙工場は輸入による調達を優先するようになり、台湾各地の紙廃棄物も間接的に影響を受けて行き場を失い、業界川下の回収所に積み上げられることになる。

同じく資源回収業を営む張さんも、同様の問題に直面している。ただ、張さんが取り扱っているのは、主にプラスチックである。新北市板橋区にあるこの廃棄プラスチック回収場はとても大きく、分別ラインが設置されている。多数の女性従業員がベルトコンベアの前に並び、回収されたプラスチックを種類ごとに選別している。ペットボトル、薄型のプラス

チック類、プラスチック包装紙などのほかに、廃紙、鉄・アルミ缶、紙容器など、本来ここにあるべきでない異物が混じっていることもある。

「回収品の中身は乱雑で、一袋の中に何でも混じっているんだよ」と張さんは言う。ここにあるのは、個人の回収業者から直接持ち込まれたものではなく、小規模の仲介業者や慈善団体などを経て回収されたものである。回収品目はプラスチックとペットボトルであるにも関わらず、慈済のリサイクルセンターから送られる物資を除き、その他のルートで送られた物資には異物が多いため、分別ラインを設置して、従業員を雇って分別し





なくてはならない。ここでは、二十数種類に分別している。

回収場の空き地には、薄型の廃棄プラスチックをブロック状に圧縮して造った、「プラスチックの壁」が並んでいる。張さんによれば、ペットボトルや牛乳用のボトルや缶類であれば、政府の回収基金が回収業者や処理工場に補助金を出すため、外国ごみの影響はあまり受けない。しかし、政府が補助金を認めないその他のプラスチック（プラスチック雑貨や薄手のプラスチック容器など）は、以前であればまだ引き取ってくれる処理工場もあったが、最近では海外から安価な廃棄プラスチックが輸入されるため、引き

取ってくれる業者はあまりいない。

補助金の対象外となる、その他プラスチックの成分は複雑で、混合材料のものもある。例えば、お店でよく見かける、トマトの入っているプラスチックケースは、主要成分はPET（ポリエチレンテレフタレート）であるが、それ以外の物質も混ざっている。処理業者にしてみれば、余計なコストをかけてまで、成分が複雑なプラスチックを分別して処理するよりは、海外からの輸入という安価な手段を選ぶのである。

「ただであげるといっても、要らないと言われるんだよ」張さんは、今後同じ状況が続くようであれば、いずれ置き

場が不足した時、堆積した回収物は焼却炉や埋立地に送るしかないという。

もつとも、こうした状況は、台湾のリサイクルシステムが長年抱え続けてきた問題が、「外国ごみ」の来襲によって突然明るみに出たというだけのことである。

## ボランティアの人知れぬ苦労

台湾のリサイクルの現状として、家庭から出る資源ごみの大部分は町のごみ回収している。だが、不用品は資源ごみ回収車に載せればそれで終わりではない。リサイクルの流れにうまく乗せるためには、その後も多くの試練が待っている。





近年、資源ごみの価格は変動が激しく、人件費も上昇している。そのため回収業者の中には、廃棄物を放置したまま、価格が回復するのを待つ人もいる。昨年、紙ごみの価格が崩壊した時、新北市のある古紙処理業者は損失を抑えるために入札を棄権した。

また最近では、回収業者が回収物に求める品質や分別の基準がさらに厳しくなっている。例えば紙類についていうと、従来紙パックと古紙はまとめて回収することが多かったが、実は紙パックは製紙工場でそのまま分解して再利用することができないため、最終的にはごみとして捨てられるのである。



集車によって回収される。小規模回収業者、個人回収業者、または慈済のリサイクルセンターなどに直接引き渡すのは多くない。県や市の多くは、集めた資源ごみを競売の方式で回収業者にまとめて売却し、落札した業者は、さらに外部委託するなどして細かく分別を行った後、製紙、プラスチック、金属等の再生処理工場へ販売する。

●慈済の内湖リサイクルセンターでは、ボランティアが実物を使った説明の看板を用いて、リサイクルできるもの、できないものの分別を示している。プラスチック廃棄物の材質には多くの種類がある。慈済のリサイクルセンターは各地の回収業者の取り扱い項目に応じて、回収項目を調整している。

最近では製紙工場の要求に従って、回収業者は二種類をきちんと分別する必要がある。古紙はそのまま製紙工場へ送られるが、紙パックはラミネート部分を分離する技術を持つ処理工場へ送られ、分解して再利用ができる状態にするのである。

慈済リサイクルセンターのボランティアたちは、以前から丁寧な分別をしていたため、最近の回収所による分別基準が厳しくなっても、あまり影響は受けない。

慈済の三重リサイクルセンターを訪ねた。プラスチックを分別するコーナーでは、ボランティアたちがプラスチック袋と、ペットボトル以外のプラスチック資源の分別を行っていた。ボランティアの





呉連湊がきびきびと回収物を選び出し、三つの袋に分類して詰めていた。熟練した技術によって手で触るだけでどの分類に属するのかが分かる。

三重リサイクルセンターは慈済の三重、静思堂の傍にあり、士林、天母、萬華、中和等のリサイクルステーションからのペットボトルは全てここに運ばれる。ガラス瓶は、三重、新莊、蘆洲等のリサイクルステーションから送られてくる。センターの空き地には、ガラス瓶が透明、茶色、緑色の三種類に分別して集められている。その横にはペットボトル、牛乳ボトル、硬質プラスチックなどの置場があり、どのコーナーもいっぱいに積み上

げられていた。

台湾北部の経験豊富なリサイクルボランティアである葉明珠によると、昨年から回収業者の求める価格基準が異なり、要求が厳しくなっている。例えばガラス瓶についていうと、以前はまとめて回収してもらえたが、今は三色に分類する必要がある。ペットボトルも同様に、透明、緑色、その他の色に分ける必要がある。また牛乳ボトルも白色と透明色に分別しなければならなくなった。

ボランティアたちの分別作業が大変であることは避けられないとしても、一番恐れているのは、回収業者が引き取ってくれなくなることである。回収品がごみ

として焼却炉や埋立地に送られ、台湾の環境破壊に繋がることはどうしても避けたい。慈済リサイクルセンターは台湾のリサイクルシステムにおいて、人々から資源ごみを回収した後、分別してから業者に引き渡すまでの重要な過程を支えているのである。

## 資源を救え！大作戦

新北市中港リサイクルセンターのボランティアである江美秀が持っているリストには、センターで取り扱う回収品の

●プラスチック容器の回収は難しく、1回使用しただけで、ごみになってしまうものが多い。





●一般の人々から慈済リサイクルセンターに送られてくる回収物は、きちんと分別されていないものが多い。ボランティア達は先ずペットボトル、紙類、プラスチック類など大まかに分別した後、さらに細かく分別される。

で人気のない素材についても、人員や場所の問題を克服しつつ、取り扱いを続けている。

中港リサイクルセンターの三階には、あたり一面にプラスチック袋が広げられている。江美秀によれば、これらは青果市場から運び込まれたグアバの包装に使われる袋であり、分別した後、乾燥させて初めて、業者に持ち込むことができるという。

プラスチック袋は、加熱して溶解され

種類、価格、回収業者が詳細に記録されていた。回収品は多種多様であり、紙類、金具類、プラスチック、電球、電池など、百四十項目を超える。

江美秀によれば、詳細な分別のおかげで市場一般より影響は少ないとはいえ、昨年「外国ごみ」が大量に輸入されたため、識別コード五番のPP（ポリプロピレン）と六番のPS（ポリスチレン）の二種類からなる薄手のプラスチック廃棄物に関しては、既に引き取ってくれる業者があまりないという。

薄手のプラスチック廃棄物は日常の至るところで見られる。例えば果物やケーキなどの食品を入れる透明のプラスチック

ケースは、回収市場ではごみと同様に扱われる。小さくて軽いため、大量に集めなければ処理ができない。そのうえ、大量であるため、異物が混入しやすいからである。

また、これらのプラスチック廃棄物は食品や飲料のケースとして使われることが多く、付着した汚れを設備で洗浄処理した後でなければリサイクルできない。手間がかかるうえ、利益も低いため、回収業者も当然引き取ってくれないというわけである。

プラスチック袋も、薄手のプラスチックと同様の困難に直面している。慈済リサイクルセンターでは、これら回収市場







## 正しい方法で ごみを資源に

### 紙容器

弁当箱、飲料カップ、牛乳パック、テトラパック等

### NG行為

- 古紙と一緒に回収する
- 洗わず回収箱に入れる



### 正しい方法

浄し、種類ごとに分別することで、古紙パルプ、プラスチック・ペレット、アルミ箔としてリサイクルされる。

### プラスチック容器

プラスチックボトル、プラスチック容器など



### NG行為

洗わずに回収箱に入れる

### 正しい方法

- ボトルはきれいに洗う
- プラスチック容器は各県や市のごみ収集センターや慈済のリサイクルセンターに回収の可否を確認する。

## 物の寿命を全うする

てから再製されるのだが、袋の中に水分が付着していると、溶解処理の過程で破裂を招く危険性がある。そのため回収業者は、きれいに洗浄してから乾かすことを要求している。こうして初めて、誰も見向きしないごみが回収され、他のごみと一緒に焼却または埋立されることがなくなるのだ。

杜許錦珠は片隅に座って彫刻刀で透明な硬質プラスチックのケースに付いているラベルを一つ一つはぎ取っては、手前の大きなビニール袋に放り込んでいた。その動作は速く、まるで熟練した職人の

ようである。「異物はすべて分離しないと、業者が後処理するのに困るんだよ」。

続いて、プラスチックケースを地上に投げつけると、カランカランと、大きな音が鳴った。彼女は笑いながら、この音は五番の硬質プラスチックだよと言った。

リサイクルセンターには彼女のようなお年寄りがたくさんいる。彼らは資源回収に長年携わってきた経験から、手で触れたり、音を聞くだけで、そのプラスチックがPS（ポリスチレン）、PC（ポリカーボネート）、アクリルのどれに当たるのか、判断することができる。

江美秀によれば、資源回収には実は細

かい点が多い。回収品の材質は様々で、分別は複雑である。最初のころは業者を呼んで、分別の細かい方法について教えてもらったという。

「このリモコンは、そのままでは誰も欲しがりませんが、中身をすべて分解すると、人が欲しがれるものになるのです」江美秀は、故障したリモコンを持ってそう言った。

テレビのリモコンの外側はプラスチックでできており、内側は回路チップ、銅線などで構成されている。分解した後には一番価値があるのは銅線だが、分解しなければ、ごみとなって捨てられてしまう。



このような細かい分別も、リサイクルセンターのボランティアたちの仕事である。捨てられた物を有用な資源に変えるのは、彼らの忍耐強さに掛かっている。なお興味深いのは、あらゆる回収品が細かな分別を必要としているわけではないという点である。例えばペットボトルは本体、蓋、ラベルの材質が全て異なるが、ボトル本体から蓋を外すだけでよく、ラベルをはがす必要はない。

「これらの容器は資源回収管理基金の補助が出るからです。内容確認のためにラベルを残しておく必要があるのです」。江美秀によれば、これらの容器は、製造

業者が生産時に支払う回収処理手数料が回収処理基金として使用されるため、ラベルはこのほか重要なのである。

一方、引き取ってくれる業者がないため、リサイクルセンターが処理に困るような回収品もある。江美秀によれば、古着はまさにそのような状況にある。ファーストファッションの流行によって、人々が服を買い替えるサイクルが速まり、古着が大量に発生している。慈善団体の需要量には限界があり、海外に売ろうにも供給過剰となっている。これは既に、台湾のすべての人々が直面する大きな問題だと言えよう。

### 捨てる前に考えよう

世界情勢の変化が回収業者や処理工場の取り扱い項目や利益に影響を及ぼしているが、市場の状況がどうあろうと、慈済のリサイクルボランティアたちは、今まで通り回収を続け、細かな分別を行っている。まだ使える資源を焼却炉に送ることは決してしない。

台湾の資源回収率は五割以上に達すると言うが、多くの廃棄物はごみとして捨てられ、リサイクルによる延命がなされていない。リサイクルシステムに入った廃棄物にも長い戦いが待っている。きれ

いなもの、分別可能なものは、戦いに生き残ることができる。だが、複数の素材が混合しているもの、汚れの付いたもの、大型の処理場が引き取ってくれないものは、最後にはごみとして捨てられる運命にある。

どんな素材や品物であっても、まずは使用量を減らすことが大正解である。ものを大切にすることでその根源と言える。あなたの手中にある廃棄物や不用品は資源になるのか、ごみになるのか？捨てる前によく考えてみてほしい。

（資料提供・劉軒宇）

（慈済月刊六三二期より）



# リサイクルセンターへの短い旅 実情を見て心が震撼した



文・葉子豪 撮影・黄筱哲 訳・惟明

台湾全土にある八千八百を超える地域リサイクルステーションは大衆の実地体験を歓迎している。元はと言えば、人々は便利なライフスタイルを享受してきたために、知らないうちにこれだけ多く環境を汚染してきたのである。環境を守る要になる人物は己であり、「物を廃棄物にさせない」ことは実現可能なことである。

## ア

アメリカのウォー  
ル・ストリート・

ジャーナルは二〇一六  
年五月号に「台湾：ゴ

ミ処理における世界的  
な達人」(Taiwan: The  
World's Geniuses of  
Garbage Disposal) と  
題した記事を載せて  
いる。台湾のゴミ資源  
の回収率が五十五パー  
セントに達し、アメリ  
カの三十五パーセント  
●台北市内湖区にある慈済の  
環境保全教育センターでは、  
ボランティアが来訪者に廃棄  
物による環境汚染問題を説明  
していた。去年1年間だけで  
も約400の団体、1万3千  
人余りが訪れた。





● 慈済ボランティアである実業家が「R2R二次回収」の技術を開発し、ペットボトルでできた災害支援用物資を再度回収して、他の製品に作り変えることで、廃棄物を最大限に減らしている。

同時に「顔を挙げて環境保全を解説する」に慈済の環境保全について話し始めた。一行の「小さな旅」の目的地は台北市内にある慈済内湖環境保全教育センターである。彼らが来る前に、既に（中国福建省）泉州からのリサイクルボランティアやアメリカ・ダラスの学校の校長先生たち、及びシンガポールの小学校から先生と生徒たちが訪れていた。年間三百回を超える見学ツアーは内湖のボランティアに「下を見てリサイクル活動する」と同時に「顔を挙げて環境保全を解説する」

国際的な評論によると、台湾人の環境保全意識と行動は世界でもトップクラスである。しかし、自分の土地でいくら努力し、環境保全の成果を挙げても、海を越えて海外から廃棄物が流れ着き、日に日に世界の環境破壊が進む中、安心してはいられなくなってきた。

その為、慈済ボランティアは腰を屈めてリサイクル活動をしたり、地域住民を誘うと共に、廃棄物や二酸化炭素を削減する生活理念とそれを実現できる方法を

を遥かに上回り、ドイツ、オーストリアなど環境保全の模範生にも遅れを取っていない。

世界各地に伝え、環境保全教育を社会に根付かせることに努めている。

朝食一食分でどれだけの二酸化炭素を排出しているか？

「皆さんが望んで我々のリサイクルセンターを訪れてくれたことに感動しました。それは皆さん一人一人が地球を愛するのは大切なことだと考えているからに他なりません。こちらへどうぞ！」と教職を定年退職したボランティアの鄭花が腰に付けているスピーカーを通して、遥々四川から来訪した実業家たち







●材質が単一であればあるほど回収再生し易い。ペットボトルのキャップとボトル本体の材質が異なるため、リサイクルポランティアはそれらを1つ1つ外さなければならぬ。



き分けると、その中からマネキン人形の頭が現れた。「もし、これらプラスチック袋があなたの体に巻き付いたらどうでしょうか？皆、嫌がりますよね。しかし、私たちはこれを地球に巻き付けているのです」。

エコ毛布、物の寿命を再生する  
国連環境署の統計によると、二〇一五年だけでも全世界で三億トンにも上る廃棄プラスチックが生み出されている。その七十九パーセントが埋め立てられる

腕を磨かせた。

鄭花は一行をツアー最初のブースである「タン多朝食店」に案内した。「タン多とは台湾語で大儲けを意味しています。しかし、我々は朝食から多くの二酸化炭素を作り出しています」。鄭花はカウンターの裏に回って店員を装い、「朝ご飯は何にしますか？」と見学者の一人に尋ねた。

「饅頭！」「肉饅頭ですか、野菜饅頭ですか？」と陳列棚から食品の模型を出し、バーコードを読み取ると、肉饅頭、野菜饅頭、ハンバーガーなどの食品が排出する二酸化炭素の量が相次いで液晶画面に表示された。肉を含まない野菜饅頭

の排出量は僅か〇・一キロであるのに対して、牛肉ハンバーガーの場合は四・五キロ、と排出量が四十五倍になっている。肉食が菜食に比べて環境に与えるインパクトがこれほど大きいのが分かり、どうやって地球を愛せばよいかは言うまでもない。

「台湾では一人当り一日に使用されるプラスチック袋の平均量は二・七個で、年間にすると九百個余りになります」と鄭花は二番目のブースの前で海亀の模型を手にしなが、世界中のメディアで取り上げられている海洋廃棄物の問題を解説した。彼女がプラスチック袋の山をか





か、放置されたり捨てられており、十二パーセントが焼却炉で燃やされ、回収システムに回されるのは僅か九パーセントである。

如何にしてプラスチックの使用量を減らし、使用済みプラスチックの不当廃棄を避け、回収再利用を強化するかが現在の環境保全活動で大々的に行なっている項目の一つが、回収したペットボトルから「エコ毛布」を作っていることで、国

→データの保存は今、殆どがハード・ディスクやサーバーに保存されるようになり、ビデオ・テープは大量に廃棄処分されている。リサイクルボランティアは1つ1つプラスチックのパーツや金属ネジなどの資源を回収している。



→リサイクルボランティアはカッターナイフでフォルダーを分解し、リサイクルできるボール紙を取り出していた。見た目は簡単な動作だが、ゴミを資源に変えられるのである。



内外の支援活動に使われている。内湖環境教育センターではエコ毛布の裁断加工を行なっており、実業家ボランティアは展示館を設けて、具体的にペットボトルの回収から、裁断してチップにし、次にペットフレック化し、再生ポリエステル繊維の製造、織物までの工程が見られるようにしている。

ペットボトルから抽出された糸で作れるのは毛布だけではない。大愛感恩科技会社の李鼎銘總經理は皆の前に立ち、身に付けているネクタイ、シャツ、スラックスを見てもらい、「身に付けているものは全てペットボトルからできています。私の体はペットボトルから作るの



はありませんが、私は慈済に回収、再生された資源です」と言った。

## 高齢者ボランティアは 行動で模範を示している

トタン屋根の下で作業しているリサイクルボランティアは皆、八十から九十歳の高齢者である。李広義はカッターナイフでフォルダー表面のビニールに切り込みを入れ、中からボール紙を取り出した。専念して分別した後、元来、無用のゴミだったのが再利用できる資源に変身した。手を動かす人は健康と喜びを手に入

れることができる。「十七年前、家内が慈済に来て喜んでボランティアしているのを見て、私もボランティアになりました。今はもう九十二歳です」と李広義は元氣いっぱいと言った。

七十四歳の梨錦照は隅の方で、ドライバーで廃棄処分になったビデオテープとオーディオテープを分解していた。「こういうテープは殆ど使われなくなりました」。テープのケースを解体すれば、ネジやプラスチックパーツなどの多くは回収再生できる。壊れた傘を分解すれば、骨と布地も再利用できる。

心して行えば専門家になれるのだとい

うことを、身を以て教えている。高齢者ボランティアたちの心温まる笑顔と健康な姿で、初めはあまり理解していなかった見学者も少しずつ概念ができ、感動し始めた。

「環境保全はとても大きなプロジェクトで、考えるだけで尻込みしていました。しかし、慈済に来て、細やかな心使いや表現が新しい技術に結びつき、現実の生活に返ってきているのを目の当たりにしました」とツアーが終わり、次の訪問先に移動する前に四川省の成都からきた張さんがこう話した。また、「環境保全は千万回言葉にするよりも、実践してみることが一番です」と言った。

続いて会社管理職の楊女史が、「山東省出身のお婆さんが私の訛りから中国東北地方の出身だと分かり、私に話しかけて来ました。彼女は私に東北地方にもリサイクル拠点はあるのかと聞きました。私はあるのかどうか知りません。しかし、慈済での学習と理解を通じて、私は環境保全を目指す先導者になりたいと思います」と感動して言った。

また、「リサイクルセンターの様子を見て、慈済人が自らやるべきことを知り、文化と理念を持っているのを目の当たりにしました。特に九十歳を越した高齢者たちが、慈済というプラットホーム





9% 回収済  
12% 焼却

79%  
埋立、放置または環境の中に捨てられている。



## 二〇一五年世界廃棄プラスチックの 処理方法別統計

### 再利用できないものは使用を拒む

国連が二〇一八年世界環境デーに公表した統計によると、二〇一五年、世界で廃棄処分されたプラスチック類は三億トンで、その中の僅か九%が回収されているに過ぎないという。同レポートには「予防」が廃棄物管理等級制度の最重要措置と書かれており、「再利用できないものは使用を拒む」ことを呼び掛けている。

で尊厳のある人生を送っているだけでなく、品格を持って生きている姿を拝見することができました」と今回のリーダーである四川省の実業家である王瑞栄会社長が一段と高いレベルの話をした。

そして、二〇一八年から中国が海外からゴミの輸入を禁止し世界に衝撃が走ったことに触れ、「輸入ゴミは中国に二回、三回と汚染をもたらします。その影響は甲地から乙地に、例えばアメリカ大陸からアジア大陸や他の場所に移しても地球上にあることに変わりはなく、地球には全人類が生息しているのです」と王瑞栄が嘆いた。

次から次へと国内外からの見学者が訪れ、環境保全教育センターで慈済ボランティアが如何にして「物には廃物はなく、人には廃人はいない」ことを成し遂げているのかを目にした。皆が行なっているのは「生計」のためではなく、大地に在る万物の「生存」の為であり、日常生活から行動することで地球を守ろうと努力している。自らの目で見て手を動かすことでより多くの人が廃棄物や二酸化炭素の排出を減らしていくことに期待している。「清浄は源から」始めれば地球環境は守ることができる。まだ間に合う。

（慈済月刊六三二期より）

# 買い物袋の循環使用

素晴らしい思い付き・道を切り開くきっかけ



文・葉子豪 撮影・黄筱哲 訳・斉運

地球を愛する人々は共通の智慧と認識を持っているが、実行するとなると往々にして面倒くささと不便さを感じて疎かになりがちだ。数人の若者はアイデアとハイテクを組み合わせ、「ユーバッグ」と名付けた環境保全運動で以て、「プラスチックの使用を減らす」きっかけとなる道を切り開いた。

## 買

い物してレジに向かう時になつて、家にとっておいた買い物袋を

また忘れてきたことに思い当たる人はいらるだろう。結局「幾らかお金を出して、

数回しか使わないレジ袋を買おうか？それとも環境保全を貫くために両手で物を抱えて帰ろうか？」と迷う。

二〇一三年、数人の大学生とサラリー

マン、建築士が循環して袋を使用する運動を始めた。台北市のシェアバイクシステム「ユーバイク」の概念に倣って「ユーバッグ」と名付けたその運動は、インターネットのプラットフォームを通じて提供者と消費者と店舗とを結びつけた。今日現在既に朝食屋や本屋、花屋、クリーニング屋、レストランなど様々な店が参加しており、人々に買い物の利便さとプラスチックレジ袋の使用減の双方を提供している。

●パン職人の陳ユージン（ひへんの下に立でユー、謹のごんべんをおうへんにしたジン）（左）は袋の循環使用計画に参加し、環境保全と利便さの双方を実践している。既に165の店舗がこの行動に参加している。





家に溜めるよりも  
みんなで使ってもらおう

「どんな家庭にも使わない袋が幾つかはあるはずです。もし、それらをユーバイクのようにA地点で借りてB地点で返すことができれば、袋は流通するようになり、新しく使い捨てのプラスチックレジ袋を使用することもなく、使用を減らすことができるはずです」。発起人の一人である呂シュエンチ（くさかんむりに宣でシュエン、くさかんむりに止でチ）はユーバッグ・チームが始まった六年前のことを話してくれた。「当時、台湾大学

の『異なる見方クラブ』が誰もが興味を持っている問題に対して解決策を出してもらうというワークショップを立ち上げたので、私たちのチームはプラスチックレジ袋を減らす対策について考えました」。ユーバイクのような自転車のシェアがスムーズに行われているのは、管理する側が常に各地域の全てのステーションの状況を把握しているからである。あそこはもう直ぐ満杯になり、ここは数台しか残っていない、というようにはつきりと状況を把握し、直ちに自転車を配分しているのだ。ユーバッグの運営も同じような形だが、シェアバイクのように膨大な

完備された情報系統や専門の人員の後ろ盾があるわけではない。六、七人のボランティアは若くてやる気満々だが、経験と資源に不足しており、チームは先ず小さな区域または小規模な活動から始めることにした。

「初めは三峡の北大団地から始め、店舗を一軒ずつ回り、二十数軒が参加してくれることになってから袋の寄付を募集しました」。まだ大学生で記録係の翁聖ウェイ（やまへんの下に威）はチームの先輩たちがどのようにして第一歩を踏み出したかを語ってくれた。当時、ボランティアたちの考えは至って単純で、借り

た袋を返してもらえようと、お客さんは店から袋を借りる時に預かり金を十元払い、元の店か他の店に袋を返しに来た時にその十元を払い戻してくれるようにした。

預かり金は保証として当然だと単純に考えたが、派生的に思いもよらない結果が待っていた。それが面倒くさいために袋を借りたがらない人がいる一方、店の説明を聞いた後、その若者たちを褒めたえ、五十元や百元を入れて助成金にする人もおり、それを辞退することもできず、ボランティアも店の主人も直ぐにはどうしたらよいか分からなかった。「預





## 不使用、使用減、重複使用

イギリスの環境機構の研究によると、消費された資源と汚染の面で言えば、紙袋の地球に与えるダメージはプラスチック袋の3倍である。

言い換えれば、1つの紙袋は3回以上使って初めて1つのプラスチック袋に相当するのである。そして、綿の買物袋は131回以上使って初めて、環境に負荷が掛からないものになるのである。

かり金制度が妨げになって誰もが参加できるわけではなかった。そこでそれを無くし、必要な時に直接店から無償で袋を借りられるようにしました」と翁聖ウェイが説明した。

費者の必要以上の数があったのだ。

方向が正しければ、

「袋」の循環使用は理解してもらえ

「私たちはもっと単純に運動を押し進めるようプラットフォームを改善しました。ユーバッグとは何かを知ることができ、どこそこの店で袋が足りないとか、紙袋や買物袋等という種類のプラスチックレジ袋は引き取りますといった情報が分かるようにしたので、必要な人に送り届けることができるようになりました」。借りる側と貸す側の接点を見出し、そのプラットフォームを運営

それ以外に袋を整理するの

も大変な労力が必要で、買物袋を集め始めた時はボランティアの家で洗ったりして整理していた。仕事や学校の合間には商店に連絡を取ったり、会議を開いて検討したりした。きれいにした袋は一軒ずつ配送しなければならず、ユーバッグが第一歩を踏み出

して数カ月経った頃、チームのメンバーは耐えられなくなっていました。その後、皆で話し合った結果、あることに気が付いた。袋を集めなくても元々清潔な紙袋やプラスチック系レジ袋だけで商店や消

することは一層努力を注いだので、ユーバッグ・チームは現在より多くのファンを引き付けている。

大衆がこの運動を知れば知るほど、家の中に眠っている袋を有効活用することができ、商店で再利用袋が使い捨てのプラスチック系レジ袋に取って代われば、エコな善の循環が起きるのである。

台北の路地裏でパン屋を経営する陳ユージン氏は、「三年前に開業した時からレジ袋を提供していませんが、お客さんによっては不便に思う人もいました。しかし、二年前、常連客の紹介でユーバッグに登録し、行動を始めると、知らない人から再利用可能な袋が送られてきまし



た。その時からお客さんへの対応で困ることがなくなりました」と言った。

「お客さんが来ると、『清潔な紙袋を再利用しています。食べ物を入れるため、清潔でない袋は使いません。家に紙袋があれば、いつでもお持ちください。歓迎します』と紹介するのです」。

陳ユージンが一番よく使うのはお土産やデパートの買い物で提供される手提げ用の紙袋である。「彼女たちは定期的に参加している店と連絡を取り合い、袋の不足や過剰を調べて調整してくれます」と彼女はボランティアたちを称えた。

目下、ユーバッグ計画に参加している

何度も再利用することによって  
より多くの人に賛同してもらう

一路実践してきた中では走りながら模索する場面も経験してきたが、彼らは循環経済という領域で、二〇一七年に慈済が催した「青年公益実践計画」に参加し、卓越した優秀な成績を収めた。

「慈済は資源と活力を与えてくれました。担当の方が映像やネットを通じてプラスチックの使用減と循環重複使用といった参加している商店の壁にはユーバッグの加入者証が貼られ、提供して欲しい袋の種類と清潔な使用済み袋が商店で再利用できることが書かれてあった。」

店舗は百軒を超え、北、中、南部の各地及び澎湖（ポンファー）島に広がっており、個人経営の商店だけでなく著名な量販店も加盟している。そして、再利用できる袋を最大限に活用するために、チームは特に地方自治体の環境保護局と協力して、大衆の善意とプラスチックの使用削減政策が食い違わないように注意している。

「環境保護局の政策では新しいプラスチック袋さえ提供しなければ罰せられることはなく、店の中にリサイクル袋の専用区域を設けるよう提案しています」とボランティアの翁聖ウェイが説明した。





う理念を広めることを提案してくれたのです」。大学生の時に慈青社（大学のサークル「慈済青年社」）に参加したことがある呂シュエンチは慈済の青年公益実践計画に感謝した。奨励金の提供だけでなく、貴重な知識まで授かり、チームは僅か一年で参加店舗を三十数軒から百件余りに拡大することができたのである。

「私たちの協力対象は殆どが個人経営の店ですが、一軒当たり月々使用するリサイクル袋は平均して百から二百個になります」と呂シュエンチが続けた。そして、参加者は今年六月現在で百六十五軒になり、低く見積もってもリサイクル袋の使用回数は月に一万六千回を超えている。

静思語には、「道さえ見つければ、長い道のりも怖くない」という言葉がある。ユーバグの実践経験は、台湾の人々に共通する環境保全意識と地球を愛する初步的な智慧と認識を表しているが、実際に行動するととなると、人は往々にして日常生活における面倒くささと不便さに自分を甘やかしてしまうものだ。

もし、問題点を見つけて、アイデアとハイテクの利便を借りて解決できれば、数多くの「やる気はあるが、行動に移すことが難しい」と感じている人に行動を起こさせるきっかけとなり、思いも寄らない影響力を発揮できるかもしれない。

（慈済月刊六三二期より）

国際慈善

◎文・王素真（イギリス慈済ボランティア） 訳・葉美娥

## 未知の旅路

### セルビアを経由するシリア難民に寄り添う

数年前、シリア人はバルカン半島を通じて内戦の戦火を逃れていた。そして今ではもつと多くの中東や南アジア諸国の人々が、経済や宗教が原因でこの道を辿って、安全な場所であるEU加盟国で生活できることを望んでいる。セルビアの国境を通過する間、彼らは出発のチャンスを待っているが、辛い事もあれば感動的な出来事もある。

バルカン半島の国々は、二〇一五年から次第に国境を閉ざすようにな

り、大勢のシリア難民はEU加盟国に行

くことができず、セルビアに待機せざるを得なくなった。慈済はその知らせを受

け、二〇一六年の始めに、ヨーロッパの



ボランティアが支援に赴き、防寒服やベビー用品、即席飯、食器類を提供し、今でも引き続き寄り添っている。

慈済は毎年難民に必要な夏と冬の衣類とゴム草履を提供しているが、同時にオブレノヴァツとクルニャチャの二つの難民キャンプでは毎日朝晩にパンと飲み水を配付している。二〇一八年オブレノヴァツ難民キャンプに、コンピューターとテレビも提供したため、若者たちは食事の時間に世界の様子を見られるようになった。

多くの難民家族は子供がまだ小さいため前に進めず、キャンプに留まったまま何年も過ごしている。セルビア政府の難

民及び移民事務委員会は、学齢期の児童を現地の学校へ就学させるべく手配を始めた。二〇一八年九月に慈済はランドセル、本と文房具を難民児童に配付した。また、今年の初めには医療スタッフがキャンプに入って、子供たちに歯磨きの方法と健康管理を指導した。

シリアの内戦は充分鎮まってきたとはいえるが、難民が少なくなったことを意味しているわけではなく、国を離れた理由は、ただ人間としての基本的な生活を求めているからである。しかし、時が経つにつれ、周りの国々が手を差し伸べなくなり、慈善機構も去りつつある中、避難途中で足止めされて身動きできない状況は、難

民にとっては辛いことである。ヨーロッパの慈済ボランティアは諦めることなく、三年余り苦勞を厭わずセルビアを往

復すると共に、現地及び隣国のボスニアからボランティアを募って共に難民たちを支援している。

●セルビアのシド難民キャンプは主に難民家族を受け入れており、大勢の子供が小さい頃から両親と一緒にここで避難生活を送っている。この一家は今年初めに慈済から冬服を支給された。(撮影・蔡婉珍)



オ

ブレノヴァチ難民キャンプは千人近い人を収容しており、セルビア国内の大型難民キャンプの一つである。全員が男性で、パキスタン人が最も多く、次がアフガニスタン人、そして、少数ではあるがソマリア、マリ、インド、イラク、シリア、スリランカなどの国からも来ているが、彼らは大部分が経済難民であり、ヨーロッパで仕事に就くことを望んでいる。

慈済は二〇一七年から難民に朝晩の二食を提供しているが、食堂は食事の他、交流の場にもなっている。ボランティアが訪れると彼らは必ず自発的に挨拶し、



(撮影・デヤン・アセンティエヴィス)

並んで食事を待つ間もイライラすることなく、以前よりも笑顔が見られるようになった。彼らが問題に遭遇すると、ボランティアも彼らの聞き役になる。

昨年、慈済が贈った五台の六十インチ広角画面のテレビは食堂の壁に掛けられ、食事の時に英語の字幕が出る大愛テレビニュースや番組を放映している。六カ月かけてやっとセルビアに到着した、二十歳のパキスタン人カムランは、大愛テレビを見て「慈済が世界各地で人助けし、ここでも寄り添ってくれていることに感動しました」と言った。

難民管理委員のドウサンは「テレビ番

組はここに足止めされている難民に重要な情報を提供しており、我々の管理の助けにもなり、良い効果ばかりです」と言った。

今年の三月中旬、ボランティアが再度尋ねた時、一部の難民がまだ第三国に旅立っていないことに気づき、互いに顔見知りから仲良くなった。難民は、大愛テレビの番組は様々な力を与えてくれると言った。慈済ボランティアが世界各地で苦難を助けているのを見ると、自分たちも孤独ではないのだと分かったそうだ。

ボランティアの観察によると、難民たちは十数カ国からの異なる民族と宗教の人たちだが、着いたばかりの人も長く留

まっている人も皆、仲良く、一緒に食事したり運動をしており、まるで一つの大家族かコミュニティのようである。そ

れもボランティアが彼らを放棄しない理由で、そこに愛の力が既に熟成しているのを見たからである。

## ボランティアノート

### 若かりし頃

難民たちに近寄って話しかけた時、彼らの殆どが青少年であることに気づいた。その多くは半年間から数ヶ月間かけて険しい山道を越え、セルビアにたどり着いたのである。長い道中、野宿しながら、飢えと寒さの中、破れた靴ならまだしも、片方しかない人もいた。私は一人の男の子が左足に破れた

スニーカー、右足にビニール製草履を履いているのを見て、気温が零下の雪の中をどう堪えてきたのか、想像もつかなかった。

十代から二十歳の頃は、人生の中で一番重要な成長の時期である。彼らと同じ年頃に一人で海外へ留学したこと

文・陳尤重（ホンコン） 訳・李曉萍（明滬）

てあげられるだろうかという疑問が何回も私の頭の中に浮んできた。しかし逆に考えると、実は彼らが私を成長さ

せていることに気づいたのである……。私はこの子供たちが一刻も早く平穩無事に暮らせるようにと心から祈った。

### 旧友と新しい友達

今年の元旦にセルビアに来てみると、多くの新しい顔に出会った。色々な国から来ているが、みな同じ背景を持っている。宗教や民族の違いに命まで脅かされ、ただ平安な日々を過ごしたために故郷から一家で避難しているのである。こんな簡単な願いでも、実現するのはこれほどにも困難なのだ。

多くの旧友はボランティアが来たのを

見て喜び、お互いにハグし合った。子供たちはボランティアの手を引く張って、もう一度「家族」という歌の手話をやろうとねだった。私をもっと感動させたのは、毎回慈済の竹筒歳月の話をする、多くを持っていない難民たちが少ないながらもお金を寄付してくれることだった。この苦難の道で、愛の寄り添いと関心がどれ程大切なことを実感した。

文・蔡婉珍（ドイツ） 訳・李曉萍（明滬）





(撮影・陳樹微 プリシボヴァチの難民キャンプ)



(撮影・王素真 オブレノヴァチの難民キャンプ)

## 新年に新しい服

今年のヨーロッパは稀に見る暴風雪に見舞われ、三十年来最悪の天候だとメディアが報じた。ヨーロッパのボランテニアは足止めされている難民が寒さに耐えられないことを心配して、今年の正月に五日間の冬物の配付活動を行った。雪に覆われた真っ白なセルビアに、十一カ国計三十三人の慈善人が到着した。

ドイツのボランテニア范徳禄と陳樹微夫婦は、ミュンヘンから八百六十キロも車を走らせ、途中で降り続く大雪と積もった雪道を乗り越え、およそ十二時間かけてやっとたどり着いた。セルビアで

配付活動をする時はいつも活動に使う物資を運搬する重要な役目を担っている。六、七十歳のボランテニアにとって、重い荷物を車に上げ下げすることはとても大変な仕事である。特に陳樹微は、持病があつて、行動の不自由な夫の世話もしなければならなかった。単に気力と勇気が必要なだけでなく、真の願力があつてこそ、一歩一歩前進することができるのである。

慈済が二〇一六年から行っているセルビアのケア活動に、夫婦は毎回、参加しているが、いつも一番最初に来て最後までやり遂げている。そのどんな困難も乗り越えて進む姿勢にメンバーは感服し、

感動した。

難民が他国に逃げる経路は多くが険しい山越えで、森林の中に身を隠しながら国境警備員の目を避けなくてはならない。運悪く捉えられれば、拘禁されたり殴打の憂き目に遭う。何ヶ月も彷徨い、手持ちの食糧と物質が少なくなり、冬を過ごすのはなおさら大変である。気温が下がってくると彼らは難民キャンプの中に入って、寒さを凌ぐのである。

ボランティアが冬服を配付していた時、一部の難民がまだ夏の半袖を着て足にゴム草履か破れた靴を履いたまま、雪が舞う中で冬服配付の行列に並んでいた

のを目にした。氷点下何度という厳しい寒さに耐えられず、毛布で身をくるんで待つ人もいた。

クルニヤカの難民キャンプでは、難民委員会の行政規則によって、難民は雪の中で一時間も二時間も待たなければならなかった。若者だけでなく、子供を連れた親もいて、ボランティアは見るに忍びなかった。彼らを抱きしめて少しでも温もりを伝えようとした。

ある難民は、一枚しか服がなかったもので、他の人から借りて、交代で着ることで洗濯できたと言った。数人の若者は服をもらった後、すぐ宿舎に戻って着替え、

冬になってやっと服を着替えることができた、と心から喜んだ。

初めて難民ケア活動に参加したイタリアのボランティア潘雅倩<sup>パンヤチン</sup>は感慨深かった。「一部分の子供たちは防寒コートさえも持っていないのです。ここに来るまでどれほど大変だったことでしょう。彼らに比べると私たちはとても幸せだと気づきました」と彼女が言った。

今年の正月に、慈済のボランティアはオブレノヴァチ、クルニヤカ、アドアセブチ、プリシボヴァチ及びシドの難民キャンプにおいて、計二千八百六十三枚の冬服を贈った。

#### ボランティアノート

### 家族全員で一緒にいたいだけ

文・陳翊暉（イギリス） 訳・李曉萍（明滙）

難民キャンプの子供たちは本当に無邪気だった。彼らに向かって笑いかけたり、軽く手を握ってあげると、嬉しそうにハグして寄りかかってくる。

本来なら、何の憂いもない子供の時期であるはずなのに、両親の後について苦勞して長い道のりを逃避しなければならなと思うと不憫でならない。彼らは難民キャンプでは小さいながらも大人のよ



うに、親の通訳をしたり、年下の弟や妹の面倒をみている。

難民たちはボランティアを見かけると、いつも笑顔で迎えてくれる。物資を受け取った後の感謝の気持ちと満足した様子から彼らの世界がとても単純であることが見て取れる。家族全員が一緒に暮らし、三食にありつけて寝る場所が有ればそれで良いのだという。

一方、我々の生活は裕福だが、際限なくより多くの物を追求すれば、さらに多くの烦恼と不愉快さをもたらすことになる。

難民キャンプでの生活は単調で、日一

日と難民たちはいつか自分にも転機が訪れることを祈っているが、今はただ祈ることしかできない。私は奉仕の機会を得たことに感謝し、たとえ一日だけでも、彼らに慰めと希望をもたらし、世界には多くの人が彼らに寄り添っていることを知らせることが出来たとすれば幸いである。

セルビアを離れても、彼らのことを忘れたことはない。特に難民委員会の責任者から支援する団体が少なくなってきたと聞いたからだ。より多くの人が難民たちの窮状に目を向け、彼らの運命を変えてくれるように祈って止まない。

## 外の世界とつながる

あ

る六歳の女の子は両親と姉と一緒にアフガニスタンから何度か車に乗り換えたり、徒歩で一年掛けてやって来た。途中イラン、トルコ、ギリシャ、マケドニアを経て、やっとセルビアに到着したが、キキンダ難民キャンプに来て既に二年になる。

セルビア難民委員会によって学齢期の児童は地元の学校に就学することになったため、その女の子もセルビア語と英語の両方を学ばなければならない。今はさらに楽しみが増えた。慈済とデルタエレクトロニクス



(撮影・王素真 キキンダ難民キャンプ)



社がコンピューターを設置してくれたので、これから彼女はインターネットでアニメが見られ、英語の勉強もできるのだ。昨年十二月六日、ボランティアがオブレノヴァチ難民キャンプに来た時、難民委員会からある国際救援団体が撤退するので、そのスペースを改装して難民に使用してもらうことを告げられた。その時、偶然の縁でドイツの慈済ボランティア鍾家隆が勤めているデルタエレクトロニクス社に廃棄処分になる旧式ノートパソコンがあつたので、その機会に物の寿命を延ばすと共に難民キャンプに贈ることを会社が同意してくれた。今年の正月と三月に合わせて二十七台のコンピューターが設置された。

難民委員会は三つの難民キャンプを設置の対象に選択した。学齢期の児童が多いキンダとソンボルの難民キャンプ、そして若い男性を主に収容しているプリシポヴァチ難民キャンプである。「インターネットは難民たちにとって非常に重要です。家族との連絡が取れるコミュニケーション用のソフトを搭載しました」とボランティアの鍾家隆が言った。インターネットのおかげで家族と連絡も出来るようになり、また外の世界とも繋がったことで勉強の幅が広がり、世界の様子も分かってくるとの隔りもなくなつた。コンピューターは特に子供たちが宿題するのにも役に立っていると難民委員会のスタッフ・ポーナーが言った。



●撮影・王素真  
アドアセプチ（難民キャンプの難民委員タルデヤ（前列の真ん中）

### 前向きな考えをもたらず

ヨーロッパへの難民は増え続ける一方なのに、セルビア難民キャンプでは何年も使ったマットレスがすでにロボロに破れていた。昨年の後半、難民委員会は慈済に協力を求め、今年の正月に歳末祝福と冬服の配付、児童の衛生教育活動を行なった時、宿舍ケアも行い、古く破れたマットレスを目にして、交換する必要があることを確認した。

ボランティアはそれについて相談して計画を立て、二カ月後に再度セルビアに戻り、一千枚の新しいマットレスを四つの難民キャンプに贈ることにした。

その新しいマットレスは品質が良く、

柔らか過ぎず、年配者が腰や背中に痛みを覚えることもなくなる。また、取り外せるカバーは洗うことができ、常に清潔で衛生に保つことができる。三月十一日にアドセブチ難民キャンプで行われた



(撮影・デヤン・アセンティエヴィス)

簡単で心温まる贈呈式では、難民委員のタルディアも来て感動を分かち合った。「私たちは慈済人と出会えたことをとても嬉しく思っています。物を持って来るから嬉しいのではなく、喜びと分かち合いをもたらしてくれるからです」。慈済人は前向きな考えに満ちた、微笑みと愛で善と美を難民に伝え、委員たちも喜びに浸った。

シド難民キャンプのキャンプ長であるタニヤもそれに賛同した。ボランティアは配付をしてくれるだけではなく、同時に子供たちと遊んだりして交流を持つてくれることが、他の慈善機構と違うのだという。「以前の私たちはただの友人関係でしたが、今では家族のようです」。

今まで何人かで一つのベッドを使っていた難民家族もいたが、新しいマットレスが敷かれると、子供たちが待ちかねたようにベッドに飛び込んで寝心地を確か

めていた。そして親指を立てて「いいね」という表情を見せたので、ボランティアたちは嬉しくなった。

(慈済月刊六三〇期より)

## ボランティアノート

### 千里でも遠くない

この三年間で十回ほどセルビアのシリア難民を慰問した。毎回後押ししてくれる家族と七十一歳になってもまだ健康であるこの体に感謝し、大切にしている。ボランティアチームの中では年長者だが、まだ各国のボランティアと一緒に学ぶことができるのだ。外国語は苦手で、笑顔とハグで難民達の心を慰めている。

文・慈直(オーストリア) 訳・李曉萍(明浩)

毎回千人もの難民に会い、彼らの哀愁に満ちた悲しい目つきと、季節に合わない服装を見る度に、憐れみの情が心に湧いてくる。彼らには一日も早く理想の安全な場所にたどり着いて欲しいものである。また、自分も健康であり続け、慈済人として長く菩薩道を歩けるようにと願っている。





【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・林錦濤

## 一分一秒たりとも無駄に過ごさない

過去を回顧すればするほど、

自分が今ここに在ることの有難さを切実に感じる。

今この時を大切にし、未来のために一層努力しなければならない。

この身を利用できる間は、一秒たりとも放棄せず、

ある限りの時間を費やして生命を発揮し、

心してその価値を高めよう！

## 六

月十五日に行脚に出かけた日は病を抱えていながらも各地を見て回りました。訪れた各地で「あの年、

あの人、あの一念を忘れるべからず」

について、皆の以前の話を聞きました。

七月十五日に戻るまでの三十一日間、

私は毎日のように自分を奮い立たせて

いました。毎日、ボランティアたちが

愛のエネルギーを発揮して世の中に奉

仕しているのを見て、皆の生命の尊さ

を感じ、感動の中に浸っておりました。

台湾の九二一大地震が発生してから

今年で二十年になります。被災後、慈

済は五十一校の校舎を再建する希望工



程という支援計画を引き受けました。子供たちは校舎の損壊で学業を中断したことはなく、その多くは今は大学を卒業して社会人になり、母校で教鞭をとっている人もいます。

当時、慈誠隊員が被災地の建設現場に長期駐在して景観工程に携わり、慈済委員は交代制で炊き出しをしており、その軌跡は今でも残っています。慈済人の生命がそれら学校と密接な関係にあるのは、彼らが世の中のために「無縁大慈・同体大悲」の精神を発揮したからです。

また、慈済は被災地に千七百戸の仮設住宅を建設して、被災者の過渡期の

生活に提供しました。ボランティアは男女を問わず協力して鉄筋を担いだり屋根の上に上ってネジを取り付けたりし、夜は床に寝て、片時も惜しんで建設を急ぎました。

台中に行脚した間、曾て仮設住宅に住んでいた被災者が皆の前で話してくれました。「仮設住宅に入居した時は家具などの設備は全て揃っていました。そして、三年の期限が来て引っ越した時、私は浴室の洗面台など家具を新しい家に持つて行きました」。今年、大愛テレビ局の記者が彼を取材した時のこと、慈済が選んだ家具は一番良い品質で、入居者が使い易いように配慮さ

れていることに言及した時、彼は急いで洗面台を調べ、国際的に有名なメーカーだったと知ったのです。彼は慈済人の誠意を感じると共に、自分は施しを受けたのではなく、尊重されていたことを感じたのです。

この数十年来の重大災害支援を省みるのは、「懐かしむ」ためではなく、再び災害が起きないことを願っているからです。非常時には、慈済人は一切を顧みず、どれほど重く困難な任務でも全うし、「慈悲深い人」となってこの世に幸せをもたらします。あの時の記憶を思い起こし、慈悲利他する細胞を眠らせないと同時に、絶えず愛を啓発し

て福を作ることに努めるのです。

神仏に加護を願うのではなく、福を作ってこそ幸せが訪れるのです。人々に共に福縁を結ぶよう呼びかけて初めて、社会は平安になります。善を積む家には余慶（祖先の善行によつて子孫が得る幸運）があり、福が多ければ、人助けができます。そして人々を利用するだけでなく、自分の人生の価値を高めることにもなるのです。

過去を回想すればするほど、今を大切にしなければならないことがよく分かります。今を大切にすれば、将来もつと努力するようになります。私の青年期も中年期も一秒毎に過ぎて行きまし

た。今は老年期までも過ぎ去ろうとしています。年を取れば、体は病苦から免れられず、話しをすることさえ思うようになりません。しかし、私は力を尽くして自然の法則に向き合い、一層努力し、一分一秒を惜しんで生命の価値を作り出し、慧命の時間を勝ち取ろうと思っています。

行脚に出ていた間、ひっきりなしに発願したいという人が来て、「法師、私は最後の一瞬までボランティアします」と言いました。五十数年前に慈濟を創設した時は、私はまだ若かったのですが、今は過去を呼び戻すことはできません。生、老、病の後にはもう一つの

関門があり、次に目を開けた時は、私は何処にいるのでしょうか。この生涯で福縁を結んでいれば、心は安らかになり、必ず縁のあるところに生まれ変わるでしょう。そして再び衆生を悟りに導きたいと思っています。皆さんも私と離れるのが忍びないというのでしたら、私より先に行く人を私は呼び戻し、私より遅く来る人には手招きをして呼び寄せましょう。皆さんもいつの世でも菩薩道から離れないようにしてください。

まだ体が利用できる間は、一秒たりとも無駄にはできないのです。私は休息せず休暇も取りません。私はまだ生

きているのですから。まだこの体で沢山の事をやらなければならないのです。時間があるだけ生命を発揮して、この人生の宿題をやり遂げるのです。日々

自分を訓練し、知識を智慧に転じてこそ、未来の方向も自分で定めることができるのです。皆さんも心して精進してください。(慈濟月刊六三三期より)

## □いの一日とこの一秒

毎日が唯一の一日であり、毎秒が唯一の一秒なのです。どんなに短い一瞬や一秒であっても、慎んでしっかりと使うべきです。

『静思語・  
人の基本は孝行にあり』より)



絵・蘇芳霏

# 師と弟子との縁は この世で円満に結ばれた

一九七七年に屏東が強い台風サロマに襲われました。慈済は直ちに支援活動を展開し、その縁で屏東支部が設立され、数人の女性が今までとは違う人生を歩むようになり、家庭を出て社会に足を踏み入れました。

**花** 蓮に帰った時、法師は私の短い髪を見て目に涙を浮かべ「どうして髪を切ったの」とおっしゃいました。二、三十年前のことで、花蓮慈済病院建設資金を募るために、陳満は黒髪を切ってバザーに出したのです。

陳満の慈済委員番号は一七二で、法名は静行です。師と弟子の情は、屏東が一九七七年台風サロマの来襲に遭い、上人が屏東に災害視察や支援に來られた時から始まりました。阿満こと静行師姐は支援活動で師匠と共によく出かけることが

あり、その時に師弟の縁が結ばれたのです。

慈悲心に満ちた陳満はその時から頻繁に花蓮静思精舎に戻って畑仕事等を手伝いました。法師や常住師匠たちの側で衆生ために奔走されておられる法師の苦勞が身に沁みため、募金集めを發願してより多くの人が慈済に参加するよう期待しました。

慈済創立当初は、車二台に分乗して一日かけて家庭訪問し、師姐たちは炊飯器や漬物、切り干し大根の炒め物などの他、阿満の得意とする豆腐の漬物を持参し、昼になると木陰に座って「訪問ランチ」を食べました。

阿満は自転車に乗れなかったので、弁当を持ってバスで淨財を集めに行き、昼

時になると道端に腰を下ろして弁当を食べていました。

彼女は法師にお会いしてから、出逢う人ごとに慈済を説明しました。法師に追従して菩薩道に励む心は堅く、四十年以上もどんな善事も喜んで奉仕しました。彼女は二〇一八年九月四日、慈済世界の美しさを説き続けた満百歳の人生に終止符を打ちました。

## 模範的な過去の行い

陳満の実家は新竹で、父親は鉄路局に務めていました。家庭の経済状況は良く、日本統治時代でも兄妹五番目の彼女は小学校に行くことができました。その後屏





東に嫁いで、電力会社に勤めていた夫の李同寿との間に一男一女に恵まれました。生活に心配がなかった彼女は慈済に巡り合った後、悠々とした生活を一変させたのです。当時の様子を語ってこう言いました。「時間があれば精舎に行き、忙しく厨房の手伝いをした後、畑で雑草取りをしました。雑草は取るよりも伸びるのが早く、こちらで取ったと思ったら、向こうで生えてくるので永遠に取りきれません」。

勤儉な日常生活をする精舎では、時には塩漬けた豆腐を数日間のおかずとして出します。「食事の時、皆は遠慮して法師と同じテーブルに座らないのです。なぜなら、法師の召し上がる量は少なく、直ぐに食事を終えるので、私たちはお代

わりできないのです」と言いました。その後、慈済病院を建設することになり、陳満は一層儉約して、少しでもお金が貯まれば、病床を一つ寄付しました。法号が思修の夫も賛成してくれました。彼女は若い時から貧困者や弱者に尽くし、晩年は子供や孫の孝行に恵まれ、一人息子の李春長は模範父の名誉賞を受けました。

「私の孫が日本へ留学していた時、私の足が悪いと知って軽い日本製のシルバーカーを送ってくれました。家から出る時はそれを頼りにし、歩き疲れた時は座って休みます」。息子と孫たちが優しいので、陳満はとても幸せなのです。

彼女の応接間の壁には、所せましと慈

済に参加していた時の写真が飾られていました。人々に初期の法師の大変な生活を話して聞かせる時、いつも涙ぐみました。そして、話の終わりはいつも顔を上げて「法師様、お体を大切にしてください。貴女様を必要としている人が大勢いるのですから」と言いました。

陳満は社会と家庭に対して無私の奉仕をしてきました。足るを知り毅然と責務を果たした人生は、慈済人の模範として後輩を教育しているのです。

（慈済月刊六二七期より）

●陳満（写真中央）は2014年4月屏東の古参委員や後輩委員と一緒に、花蓮精舎に帰った。沿道しきりに、私たちの故郷へ帰って上人にお会いし、蠟燭作りや洗濯のお手伝いをする、と言った。（撮影・林美瑜）

## 山に囲まれ再び青春を生きる

焼け残った天燈（ランタン）が落下して、資源回収所が火事で焼失した。  
 菁桐<sup>チントウ</sup>には近所の人達が集まって世間話をする場所がなく、  
 地域のケアセンターをお年寄が笑顔で楽しく集まる場所にした。

### 台

北盆地に隣接した木柵から車で約三、四十分山道を上ると、山に囲まれた鄙びた村に着く。廃坑や鉄道、古い町並み、そして天燈（ランタン）祭りが行われる他、近くを爽やかな基隆河が流れる。休日になると観光客が訪れ、写真を撮る他に、ついでに誓願の竹筒を掛

けて、天燈を空高く上げる名所である。春が過ぎて秋になると、花開いては萎れるように、大勢の人が押し寄せていた盛況も、人口の流出で大多数の平日はひっそりとし、七、八十歳の銀髪老人がいるだけだ。新北市平溪の素朴な小部落は、またの名を「菁桐」と言う。

胡詹明珠は一九四六年に菁桐の近くにある白石村に生まれ、成長してから隣の「十分」と言う村に嫁いだ。その後、鉄道会社で働いていた夫と共に菁桐の町にある鉄道会社の宿舎に引っ越して子供を育てた。

彼女は一九七一年に鉄道会社に就職



し、宿舎の管理員をした後は改札員を勤めた。自嘲気味に「私は頭が良すぎたから合格しなかったのです」と、正社員の試験に僅か一点の差で合格しなかったことを笑顔を浮かべて話した。その後、彼女は二〇〇六年に定年退職した。

習い事の好きな胡詹明珠は、四十年間絶えず北管という楽器の練習を続けていた。「お節介屋」とも呼ばれ、一九九一年に社会局の「平溪ボランティアチーム」に入って、緊急時の支援活動に参加していた。退職後、近くの衛生所でボランティアをしていたが、視力低下や膝の手術を受けていても、血圧測定を手伝ったり車椅子を押していたりして、一刻もじっとしてられないのだった。

地元の人にとって胡詹明珠はまるで区長のような存在で、顔が広く、彼女を知らない人はいない。更に、子供の教育が評判になり、二〇〇五年には模範母親を受賞している。

その年、家族を大切にしていた夫が急逝した。彼女が悲しくて毎日涙にくれていると、同じ鉄道局員の家族で、中山区慈済ボランティアをしていた黄麗華が彼女に慈済に入って悲しい気持ちを乗り越えるよう誘った。その後は、北管の練習で知り合った、深坑地域の慈済ボランティアの李雪蘭がリサイクル活動に参加しないかと彼女に声をかけた。

證嚴法師が提唱する資源回収が地球を護るという理念に賛同している胡詹明珠

は、菁桐地区一帯に環境保全の理念を押し広め、近所の人々を積極的に説得して資源回収をした。その後、隣の人が提供した空き地に臨時の回収拠点を建てた。このことを聞いた会社の昔の同僚も、客が使った空き瓶や鉄缶、不要になった紙などを集めて持ってきてくれた。

しかし残念なことに、二年前空から完全に蠟燭の火が燃え切っていない天燈（ランタン）が落ちてきて、回収所に火災が発生し、すべてが焼失してしまった。仕方なく、胡詹明珠は住宅の手前にある限られたスペースで回収物を整理し、回収物が多くなった時は、それを運んでもらうよう木柵慈済環境保全教育センターに電話していた。いつもこの話になると、

●ボランティアの胡智慧（胡詹明珠の長男）は菁桐地域の年配者たちにストレッチを教えている。



残念な気持ちで胸がいっぱいになるという胡詹明珠は、回収物を収集する便利な拠点が一つ減ったことは同時に、近所の人たちと一緒に楽しい世間話のできる理想的な場所が少なくなったことだと嘆いた。

皆のことなので、皆で奉仕する

この町では、三カ月ごとに新北市社会局の職員が市町村を巡って年配者を対象にカラオケを楽しむ「巡迴老年カラオケ」の活動が行われているが、胡詹明珠はこのレクリエーションだけでは老人たちにはもの足りないと思い、給食サービスの提供をしようと考えた。しかし経済的に





● 菜食料理店のオーナー葉明進は毎週の水曜日、午前7時半から年配者たちを次々と車に乗せ、活動の会場まで送る。

それにしても、もう一つ問題が残っている。菁桐、白石と薯榔各地の一人暮らしの年配者たち、特に行動が不自由な人たちがどのようにして拠点まで来てもらうかを考えなければならなかった。

幸いなことに、普段から仲のいい近所の人たちが手伝ってくれた。例えば菜食料理屋の葉明進は朝の七時半から車で送る仕事を引き受けた。彼は「水曜日は私と家内は休日にする」と自分の生計を維持するより、自分の親のように年配者を拠点まで送り、活動に参加させるのだと言った。

「家にいるのはつまらない、やっぱりここが面白いよ」と会場にくる年配の人たちに比べると若く見える鄭聡栄は、今

余裕はなかった。ある日、衛生所でボランティアをしていた時、主任の林太仁医師にこのアイデアを話すと、林医師の賛同を得た。

しかし財源はどう作るべきか？悩んだ結果、彼女は「そうだ！」と思いついた。確かに天は自ら助くる者を助くると言われるように「願を掛けたら力が湧いてきたのです」と彼女はつくづく思った。高齢化社会の到来に合わせ、慈済基金会は台湾各地で老人ケア拠点を作り積極的に対応している。胡詹明珠もその援助の対象となることができたのだ。そして、二〇一七年七月五日から「慈済菁桐地域ケア」が毎週水曜日の朝、菁桐里の公民館で賑やかに行われるようになった。

年七十歳を超えているが、彼は遠くの薯榔地域に住む年配者の送り迎えをする担当者である。老いを感じ始めながらも、彼は暇があると必ず手伝いに来る。まだ動けるうちは社会奉仕のチャンスがあれば把握し、年配者のケア活動に力を入れ、人手不足の解消の役に立ちたいと思っている。

休日や衛生所の看護師が会場に遅れた時など、代わりに協力している人物は菁桐地域発展協会理事長の楊明益である。彼が年配者の血圧測定をして健康状態を記録している姿をよく見かける。床に敷物を敷いたり、テーブルや椅子を並べる必要がある時は、皆喜んで袖を捲くりあげ、一緒に手を貸してくれる。

健康に目を向ける 今日最高だ

「私は百歳まで生きたい、百歳になっても健康的に…」と流行の髪形をしている新北市松年大学の講師である蔡裕馨は、会場へ次々に訪れる年配者に対し笑顔浮かべながら声を揚げて体操を教えていた。彼女は年配者の口や体が良く動くように、手を叩いたり、体を揺らしたり、耳たぶを引っ張ったり、頬のマッサージをしたりする他、隣の人と肩を組む一連の動作を繰り返し示していた。

「今日一番素敵なのは誰でしょう？」と蔡裕馨先生は年配者たちに聞いた。「先生だ！」と可愛い自分たちの娘のような先生に年配者達は口を揃えて言うてからどつ

と大笑いした。蔡裕馨もありったけの腕前を発揮して冗談まじりに歌を歌ったりして、年配者達に楽しんでもらっているため、笑い声は終始会場に溢れていた。

「何もなくても考えて何かしていれば、認知症にはなりません」「手を高く上げる動作をすれば、腕の筋肉の萎縮を抑えることができます。毎日自分で行えばもっと効果的です。分かりましたか？」と蔡裕馨が北京語と台湾語を交えて、健康の知識を伝えた。そして家にじっとしていると居眠りしてますます元気がなくなるから、活動に参加するようにと励ました。

「さあ、一緒にやりましょう」と画面に映し出された動きに合わせながら、ヨガマットの上でポーズをして見せるのは胡

智慧である。彼は胡詹明珠の長男で、新竹のある有名な電子会社に勤めているが、休日にはこの体操の時間を手伝っている。

首と肩のこり解消法から、腰の強化トレーニング、そして背骨の矯正まで、彼は一つ一つゆっくり教えた。更に血液の循環をよくするストレッチのために、マッサージボールや弾力ボールも購入して無料で提供し、年配者たちに喜ばれていた。

手伝ってくれるのは息子だけではない。娘の胡素真も来てくれた。この日、台所を担当する人が体調を崩して欠席したので、助手役の胡素真が代わりに努め、ボランティアの呂麗卿や地元的环境保全ボランティアたちと一緒に腕を振るった。

年配者に寄り添い、料理の確認や台



● 菁桐地域発展協会の楊明益（左）が年配者の血圧を測り、測定値を記入している。

所の手伝い、進行係りなどをしながら、七十三歳の胡詹明珠はこまねずみのように忙しくしても笑顔を決やさなかった。彼女の奉仕する姿を目にした息子や娘は、自然に歩み寄り、母と行動を共にしていた。

物価が上昇しても、毎週のように四十人から五十人以上の人々に食事を「食べ放題」で提供するが、時には経費不足になることもある。だが、心の優しい近所の人たちが野菜や果物、デザートなどを直接台所に持ってきてくれたり、お金を寄付する人もいた。彼女が「彼女は二千元も寄付してくれました」と胡詹明珠が近所に住む心優しい黄玉燕を紹介した。力だけでなくお金も寄付してくれた黄玉燕に、胡詹明珠は心から感謝していた。

「ではならないと思います」。胡詹明珠は法師の「生きているうちは動きましよう」という教えの通りに積極的に社会奉仕活動に参加している。法師が展開した慈善活動や、環境保護、医療などの志業に参加できるとに心から感謝していると言った。

「法師は五十歳を寿命宝蔵に預けるように、と言われましたが、私の場合は五十歳を預けると二十三歳ですから、まだまだ若いのです」。自分は勉強が足りないのに、色々学ばなくてはならないと謙遜して言う胡詹明珠は、もっと多くの年長者が健康的で楽しく幸せに暮らせるようにするため、自分はずっと頑張らなくてはならないと思いつつながら菩薩道を楽しんで歩んでいる。

（慈濟月刊六二七期より）

●テーブルに運ばれている美味しい料理の皿を、胡詹明珠が並び変えている。



インドネシアから来て介護の仕事をしているライラさんも楽しい雰囲気を感じて卵がいっぱい入った袋を持ってきた。それを皆に差し上げたのでゆでてくれるように胡詹明珠に頼んだ。

### 寿命宝蔵に年齢を預ける

「法師が開示する仏法をいつも聞いていますが、年を取っても自分が年寄りだとは思っていません。活動に参加した方が体にいいし、顔も若く見えると思うのです。これはまさに法師がおっしゃっている慈済クリームの効果なのです」。

「子や孫たちが良い報いを受け、皆が幸せであるように、私は善行の歩みを速めなく





## 踏み出せば到達できる

目に見え、到達できるのであれば、心して成すべきです。歩き出しさえすれば、どこまでも行くことができ、もっと多くの人を助けることができるのです。

純粹で穢れのない愛

◎文・釋徳仇／訳・済運

九日、上人は慈友会のボランティアに、慈済が東アフリカでサイクロン・イダイ災害を支援した話をした。「今、既に長期支援の計画に着手しています。縁が成就するなら、貧困者のために村と町、学校を建てて、彼らが安心できる安定した暮らしの基礎を築き、未来を変える希望を持ってもらうことで代々続いてきた貧困から抜け出すことを期待しています」。

「アフリカの貧しい住民に比べ、私たちはとても幸せです。それは過去の世で福を作ったため、今世は善因と福縁に恵まれ、平和で福のある環境に生まれたり、たとえ貧しい家庭に生まれても自分の努力によつて貧困から脱して事業に成功したりしているのです。福がなければ、業に従つて貧しい家庭に生まれたり、たとえ裕福な家に生まれても、突発的な無常によつて家が没落して貧困になつてしまつたりするのです」。上人は世の衆生相をよく見て、自分に警鐘を鳴らし、言動を慎んでより多くの福を作るよう大衆に説いた。

「アフリカのために、この目で見て行き着くことができるなら、心して精一杯支援してあげるべきです。私たちが実際に支援できる範囲は限られていても、歩調を進めればより遠くまで行き、より多くの人を支援できるのです」。

上人は、皆が国際慈善支援に呼応すると共に、先頭に立つて呼びかけ続けてくれていることに感謝した。「金銭の多少ではなく、最も重要なのは真心からの奉仕です。できるならチャリティーバザーや会食という方法による募金はして欲しくありません。金銭が絡むと

どうしても愛が疎かになると同時に、人々の購買欲や食の欲を誘発してしまいます。誰もが遠い国で苦難に喘ぐ人やその状況を見て慈悲心を啓発し、心の底から奉仕したいと思うようになることを願っています。金銭の多少に関わらず、それは純粹無垢の愛を意味しており、一人ひとりの誠意で以て福を作っていくのです」。

## 世の目と耳になる

三十日の人文志策会議で、上人は、人文志業の職員の心した東アフリカ災害支援の取材に感謝すると共に、貴重なこの世の歴史と苦難を助ける菩薩の足跡を完璧に再現してくれることを期待した。「メディアの力を發揮して世の人の目と耳になりなさい。あらゆる報道は心して作成されるからこそ、視聴者に深い感動を与えるのです。大愛テレビのそれらの報道は慈愛の雲のように何もないとところからこの世の情景を世界に見せ、世界中の人の愛を啓発し、誘導するのです」。

同じアフリカにはサイクロン・イダイ被害よりもっと貧しくて苦難の多い、戦乱が止まない国がある。「苦難があることは知っていても、縁がない限り、どうしようもないのです。縁があつて支援した国では、慈済人が歩んだところには蓮の花が咲いています。それはあなたたちがそこに到達して目で見て、現地の人や出来事、物を撮影して台湾に持ち帰った故に、支援する方向を見出して苦難の人々の人生を変えることができたのです。本当に感謝しています！」

上人は、慈済人が東方に未来の瑠璃の世界を築いたように、「愛で東アフリカを守った」ことに感謝した。慈済人が届けた食糧や物資は何時か尽きてしまうが、彼らは伝えられた仏法を心して吸収することで、自分の心に灯を燈すことができ、更に他の人の心にも灯を燈すことができるのである。将来、彼らの生活が改善するよう手助けし、教育で以て希望をもたらすことができることを期待している。遠くない将来、アフリカ大陸が輝きだすと信じている。

（慈済月刊六三二期より）

## 肉食から菜食へ 美味しさで 顧客を引き止める

ある常連客が看板を見上げて驚いた。「いつから菜食に変わったのだ？」実は肉食から菜食に変えて既に半年が過ぎていたが、その客は気づかなかったのだろう。コックの梁祺順は菜食でも美味しく食べてもらえると信じている。曾ては肉がなければ食事が喉を通らなかつた梁祺順は、「私にもできたのだから、あなたも絶対にできると信じています」と言った。

## 未

明の早朝五時、マラッカ州ヤシンのフードコートから證嚴法師が『法華経』を開示する番組の音が聞こえてきた。梁祺順と黄婷婷夫婦は毎日仕事を始める前に必ずテレビのチャンネルを大愛テレビ局に合わせる。忙しい一日が始まる。朝食の提供から午後五時に閉店するまで、一日中大愛テレビを付けてお客さんと過ごしている。

マレーシアのヤシンで生まれ育った黄婷婷は故郷を後にしてクアラルンプールで美容室を始め、夫の梁祺順と知り合った。結婚後、夫は料理を提供する屋台を始め、黄婷婷は美容室を続けた。二〇一〇年から、彼らはヤシンに戻って定住した



●梁祺順（左）と妻の黄婷婷（右）は日々楽しく客に食事を用意し、菜食の良さを分かち合っている。

が、「法は水の如し」の經典劇を見て感動を覚え、そこに心の拠り所を見つけた。

二〇一一年、彼らは慈濟ボランティアになり、朝山拝礼に参加すると共に一カ月間齋戒した。朝山拝礼が終わった後も黄婷婷は夫に菜食を続けたいと言うと、梁祺順はそれに賛同した。

「以前、菜食を試したことはありませんでしたが、一週間続けただけで誘惑に負けてしまいました。今回は思いもよらず、比較的簡単にできました」と黄婷婷が言った。しっかりした敬虔な気持ちがあったので、心が揺らぐことはなく、軽やかで



自在になることができたのである。

菜食は梁祺順にとつては容易ではなかった。シェフである彼は味の濃い美食を好む習慣が身に付き、肉なしでは食事の喉を通らなかった。

梁祺順は「菜食はあつさりして食べても味気ないので、好きにはなれませんが、それに順応することはできます」と言った。三十年余り吸ってきたタバコも辞められたくらいだから、菜食もきつとできると信じている。

変えると決めたら直ぐに行動するタイプの梁祺順は最初にご飯の上にカレーのタレや肉用のソースをかけていたが、野菜のさっぱりした甘みに段々慣れて来る

え、菜食者になっている。

以前、夫婦ともに菜食を始めた頃も、店では相変わらず肉料理を出していた。このことは黄婷婷を苦しめた。「自分は菜食しているのに、他人に肉食を薦め、殺生をさせていたのです。しかし、菜食料理に変えたら、店は経営していけるのだろうか？と悩みました」。

まず暫くの間はメニューを菜食と肉食を半分ずつにし、調味料は全て菜食用に変えた。それでも、黄婷婷の心は晴れなかった。

二〇一五年に二人は「法は水の如し」の經典劇に参加し、繰り返し経文を読み上げて練習した。その一字一句が殺生に

と、もう味の濃いソースに頼らなくてもよくなった。

梁祺順は諦めたことは一度もない。黄婷婷が夫の純粋な心を見て、彼の意志の強さと決意に感服した。

## メニューチェンジ

### 小さい店の対応は早い

黄婷婷のお母さんは最初、娘が菜食に変えたことに対して懐疑的だったが、菜食による健康への利點を目のあたりにした。兄弟は皆、遺伝的に高血圧だが、彼女だけは健康である。今は高血圧のお母さんも菜食の調理法を学んで食習慣を変

よる因縁果報を教えており、黄婷婷は日増しに懺悔の気持ちが強くなっていった。そして、いつも「仏法は衆生の平等を教え、證嚴法師も生命の尊重を呼びかけており、間もなく認証を受けて證嚴法師の弟子になる身として、肉食を提供し続けるわけにはいかない」と考えた。

「菜食に変えましょう」と黄婷婷が自分の考えを言うと、夫は「そうしよう！コストのことは心配するな。儲けが少なくなったら、節約すればいい」と賛成してくれた。

しかし、黄婷婷のお母さんは反対した。「フードコートで唯一の菜食の店は経営が苦しく、近いうちに店じまいす

るのよ。飛んで火に入る夏の虫になつてどうするの！」

黄婷婷はお母さんに、「今がいいチャンスだよ。肉食から菜食に変えても、他の店と客の取り合いをしてお互いの関係を悪くすることもないし、ベジタリアンのお客さんにも引き続き食事を提供できるのよ。商売が良ければ多く献金できるし、収入が少なければ節約するから、心配しないで！」と言った。

娘の固い意志を感じて、お母さんは心配するのを止めて祝福した。家族の応

●菜食の店はバラエティなメニューとオーダーしてから調理することで客を引きつけると共に、野菜が少ないマレーシア料理とは異なる選択肢を提供している。

援の下に、黄婷婷は心が軽やかになり、二〇一六年一月から菜食を提供するようになった。

美味しい料理を  
様々な民族の人が食べに来る

菜食に変えてから、顧客の反応は二種類あった。菜食と聞くと、背中を向ける人がいる一方、わざわざ来てくれる人もいる。

セールの仕事をしている黄美珍は健康の理由で菜食を二十年以上続けている。仕事の関係で各地に出張しなければならず、ヤシンに来ると食事のことで悩んでいた。「ヤシン付近には菜食の店は全くありません」。町の人の紹介で梁祺順



の店を見つけ、後に同僚にも紹介した。

「菜食に変ってから、前よりもよくここで食事をするようになりました」。ガナマニカムさんは店の常連であるが、まだ完全なベジタリアンではない。宗教の関係で、インドに帰って巡礼に参加する二カ月前には菜食生活する必要があるのだ。菜食の店がなかった頃は、自分の家で調理していたが、いつも同じようなものばかり食べていた。「この店が菜食を提供するようになってからほとんど毎日食べに来ています。野菜とご飯を選んで注文できる上、麺類もあってメニューが豊富だからです。私の食事は菜食中心になりました」。

店がある地域には、インド系とマレー

系の人が多く住んでいる。マレー人の生活には野菜料理が少なく、菜食は容易ではない。そのためマレー人であるザカリアが初めて店を訪れた時、梁祺順夫婦は驚いたが、嬉しかった。

ザカリアは一日三食を殆どそこで済ませている。彼は、「肉食は一食、最低でも八リンギ（約二百円）しますが、菜食は三から四リンギで済み、一日でかなり節約できます。菜食料理は美味しい上、健康にもよく、以前は高血圧でしたが、今は正常に戻りました」と言った。

梁祺順は、菜食料理を求めてやって来る客と対照的な一人の常連客の面白い話を思い出した。菜食料理に変えて半年が経ったある日、その常連客が看板を見

上げて驚いたように聞いた、「何時から菜食料理に変わったのだ？」常連客はメニューを覚えていて、そのまま口頭でオーダーするため、特に看板に気を留めず、そうやって半年も食べていて気がつかなかったのである。

黄婷婷は、「常連客の中には、初めは試そうとしないのですが、また来てくれる機会があると、『以前と同じように美味しいねえ』と言ってくれ、再び常連になった人もいます」と教えてくれた。

黄婷婷は以前、魚や肉を沢山食べた後、体に湿疹が出たり肌に痒みを感じ、口の中が爛れたりしたが、まさか「禍は口から」とは知らなかった。菜食して暫くしてからそのような症状はなくなり、大き



く悟ったのである。

「以前は肉料理が一番美味しいものだと思っていましたが、菜食を出すようになってからは、肉の生臭い匂いが手につくと料理の匂いまで生臭く感じるようになったのです」。梁祺順は時間があると座って常連客とお喋りするが、肉食から菜食に変えた体験を分かち合って、もつと菜食するよう勧めている。「私でさえ口の欲望を克服できたのだから、あなたもきっとできると信じています！」

（慈済月刊六二七期より）

●2015年、マラッカのボランティアたちが「法は水の如し」の經典劇を順調に終えた。その1字1句が殺生による悪業の果報を説いており、梁祺順（左から1人目）は菜食を提供することにした。

（撮影・郭巧雲）



## 菜食の産後食・産婦も衆生をも護る

陳春菊は産婦の世話をしているが、思いがけず菜食を奨励する道が拓けた。体を健康にするためには殺生しなくても、栄養バランスが取れた菜食で産婦を元気にすることができると、衆生と良縁を結ぶこともできる。このことを自分の料理の腕で伝えている。



**鍋**に熱くなった胡麻油で生姜を炒め、香ばしくなったら、ヤマブシ

タケを入れ、胡麻油がなじんだ頃にオウギとナツメ、クコなど元気にする薬膳と水を入れて煮詰める。冷え性の改善に良い胡麻油やヤマブシタケは産婦の産後食にうってつけ

● 陳春菊は機転を利かせて、栄養があつて美味しい産後食を作った。肉食の人にも健康な菜食を試してもらった。(撮影・楊秀麗)

であるだけでなく、家族全員で楽しむことができる。

中国は昔から、産婦は十カ月の妊娠期間を経て出産するため、体力を消耗し、また出産後の授乳の栄養も考えて「月子(二月の産後休養)期間」に栄養補給して元気にする必要があるという習慣がある。

七十二歳の陳春菊は産婦を世話して二十五年になる。信仰の関係で菜食を始めた彼女は十二年前、産後食を肉食から菜食に切り替えた。しかし、その過程は容易ではなかった。というのも、産後食の食材と調理方法は特別で、最初、彼女

は限られた食材に頭を抱え、どう調理したら良いのか分からなかった。

幸福な人生は長く続かず、家計のために転職した

二十五歳の時、陳春菊は大家族の長男の嫁になり、一家十二人の生活を担うようになった。

海南島生まれの彼女は結婚前、海南島料理は一品しかできなかった。姑は生え抜きの客家人で、姑以外に近所に住む従兄の嫁からも変化に富んだ料理を教えてもらい、次第に好みが異なる家族を満足させるまでになった。

しかし、幸せな結婚生活は長くは続か

なかった。夫が浮気したが、幼い子供のことを考えて辛抱して家庭を守った。彼女は生活費や子供の学費を工面するために掃除婦として働き、それが終わると実家の海産物店で山積みされた赤貝の処理を手伝うなどして、一日中働き通しの日々を送った。

四十七歳の時、母親が脳卒中を患い、生活は一層苦しくなった。友人は見かねて、産婦の世話をする仕事を紹介した。その仕事は収入が安定しており、「や」と母に大人用紙オムツを買い続けることができるようになりました。有難う」と友人に言った。

そこでの一番大事な仕事は、新生児の世話の他、産婦の食事を用意することである。

で産後食ができるようになった。一年間に八カ月は産婦に付き添い、平均して一月に魚十五匹、鶏十から十二羽、豚半匹の量を料理した。

彼女は人の世話をして元気にさせているが、自分は長年の昼夜を問わない疲労が蓄積しているため、よく病気になる。目が腫れて痛み、涙が出たため、様々な薬を飲んできたが、三十年や四十年経っても原因が分からない。

仏教を信じる友人は、目さえ治れば菜食しますと発心することを勧めた。病気はまだ治っていないが、その発願で慈済に出会い、そこから菜食の縁ができた。

二〇〇二年、陳春菊は慈済ボランティアの呉桂花と知り合い、ボランティアに

産婦の食事は健康な人の食事の調理法と違って、食材が決められている。ごま油で生姜やキクラゲを炒めることしか知らなかったので先輩に「私はここで働き続けたいと思いますが、産婦専用の食事はよく知らないのです。教えて下さい」と率直に頼んだ。

幸いにも産婦の家族が惜しみなく教えてくれ、少しずつ調理できる料理が増えていった。彼女は懸命に学ぶと共に、調理法を自己流で解釈し、メニューを増やした。

心を入れ替え、料理に専念する

陳春菊は料理を続けるうちに益々上手になり、学んだものに薬膳を加えること

なることを勧められた。彼女は料理が好きで厨房で野菜を洗ったり切ったりして、菜食の調理法を学ぶようになった。

二〇〇七年に大愛テレビの番組で證嚴法師の開示を聞いた。「動物は屠殺される時、恐怖のために体から毒素をいっぱい出します。私たちは肉を食べてはならず、衆生と良縁を結ぶべきです」という。その言葉は彼女の心に残り、他人にも菜食を勧めるようになった。産婦に出した食事のことを思い返してみると、ひと月にどれほどの殺生をし、どれほど無数の悪縁を結んでいたかと考えるようになった。「動物の命を使わず、体に元氣を取り戻させることが、私にもできるだろうか？」と思わずにはいられなかった。

陳春菊は野菜でいっぱいになった食卓を見て目を見張り、再び料理に自信が持てなくなった。それでも彼女は学ぶ精神を発揮して慈済志業体の職員のために産後食を作ってみたが、毎食同じような菜食を出した。産婦のご主人が休日に干し

豆腐や黒きくらげなどの食材を買ってき、甘酢と黒酢を加えて煮炊きすることで菜食の「酢豚」が出来上がった。陳春菊は学びながら手伝い、自分の菜食の産後食レシピに付け加えた。

陳春菊は上手に魚や肉の代わりに菜食



の食材を使い、産婦それぞれの体質や習慣に合わせて様々な料理を作った。ある時、インドネシア華僑の産婦の母親が、香茅、ウコン、生姜、亜参（酸味のある香料の一種）と鶏肉を煮込んだものを娘に食べさせていた。彼女

●陳春菊（右）は生活のために産婦を世話する仕事に就いたが、意外にも新たな人生を踏み出すことになり、数多くの産婦とその家族と良縁を結んだ。（写真の提供・陳淑環）

は傍で見えていて母親に「作り方を教えてくれませんか」と聞いた。「もちろんです。この料理は子宮の収縮をよくしたり冷え症によく効くのです」と言った。

その後、陳春菊は工夫して、亜参の代わりにトマトで酸味を出し、魚に似せた精進魚や豆腐を鶏肉の代わりに使用し、適度に甘酸っぱくして普通の人も美味しく食べられる菜食料理に仕上げた。

以前の習慣では、お産の後は大量の生姜と料理酒を使っており、退院すると直ぐに産婦に飲ませていましたが、彼女は産婦のためにも思って、医者に教えを請

い、薬剤も食材も体質に合ったものにしように考えた。以前の習慣では、産婦は野菜類を食べてはならなかったが、実は、生姜、枸杞、乾燥棗などを入れれば体が温まる。

産婦が肉食を要求する時は、食材を色々変えた菜食料理を出して勧め、その美味しさを助言している。栄養バランスを考えると同時に衆生と悪縁を結んではならないのだ。

陳春菊は今でも覚えているが、ある産婦の主人から「私は菜食は食べないので、私には出すな」と念を押された。ある日、菜食の酢豚を作ってインドネシア人の家政婦と食べようとしていた時、その主人が帰って来て、それをいっぱい食べて



しまった。それから彼は、二度と菜食を拒むことはなくなり、彼女は菜食の勧めに成功して嬉しくなった。

### 無私で伝承する愛のメニュー

陳春菊は自身の食事は簡単に済ませるが、産婦の食事には一日も早く元気を取り戻せるようにと気を使っている。

慈済ボランティアの陳淑環は二度の産とも彼女の世話になった。長男を出産した時、退院する前に陳春菊は食欲をそそる産後食を作って持ってきた。そして、退院する時、陳淑環の夫も脊髄の手術をしたばかりだったため、陳春菊が新

生児の世話だけでなく、手術後の夫の食事も用意してくれた。そのことを今でもとても感謝している。

振り返って料理ができなかった時の苦痛を思うと、陳春菊はレシピの公開は厭わない。しかし、コピーはさせないという原則を貫いている。学びたい人は自分でノートに書いてもらう。「書くことによつて印象が深くなり、途中で分からなくなれば、分かるまで私が教えてあげます」と彼女が言った。

十五歳年下の妹陳春芳にレシピを渡して「私たちは産婦の世話をしている以上、自分の娘のように世話しなければいけません。精一杯すれば、相手も感謝の気



●72歳の陳春菊（左）は持病があるが、時間があればボランティア活動に参加し、栄養のある料理を作って皆と分かち合う。（撮影・陳延北）

持ちが起きます」と念を押した。姉にならって菜食して一年余りになる春芳は健康になったことを感じ、再び産婦の世話をする仕事に戻ってからは産婦たちに菜食を勧めている。

長年の苦勞で眼の病氣だけでなく、不整脈や高血圧もあるが、いつまでも休んでいられない性格の彼女は直ぐに出かけてしまう。産婦の仕事がない時は慈済に出かけてボランティアする。「私はあまり健康とは言えませんが、毎日、菩薩にボランティアを続けさせて下さいとお願いしています。人の役に立ち、皆に料理を出せるのが最高の喜びなのです」と言った。（慈済月刊六二七期より）

# 慈濟大記事八月……………

訳・済運

|       |                                                                                                                                     |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・01 | <p>◎ヨルダン慈済基金会の設立式典が行われ、ハシユミテ慈善基金会とタラボットコミュニティセンター案件を継続する協力覚書を交わした。</p> <p>◎慈済大学で学長の交代式典が行われ、第9代学長の王本栄が定年退職し、劉怡均副学長が第10代学長に就任した。</p> |
| 08・02 | <p>6月に中国広東省河源市が豪雨に見舞われ被害を被った。広東の慈済ボランティアが本日、連平県上坪鎮下洞村で毛布、ござ、蚊帳、コメなど日用品必需品を293世帯に配付して、住民が農耕に復帰して収穫が得られるまでの困難な時期を支援した。</p>            |

|       |                                                                                                                                       |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・03 | <p>慈済大学付属高校の62人の教師と生徒たちが3日から10日までマレーシアで「国際修学及びボランティア人文交流」を行った。一行はクアラルンプールとジッダ、ペナンでそれぞれ、学校の主題学習と芸術に関する交流、ボランティア奉仕及び都会を主題にした学習を行った。</p> |
| 08・04 | <p>慈済ニューヨーク支部はシェラトン・ラガーディアイーストホテルで「愛の健康」と題した施療活動を企画し、約400人の住民に医療に関する質問の受け答えと歯科の診療を行った。また、今回初めて眼科の大愛医療循環車を出動させて視力検査と眼鏡を誂える奉仕も行われた。</p> |
| 08・05 | <p>◎5日から16日まで慈済大学中国語センターは第2回カンボジア中国語人文研修会を開き、静思語、中国語、中国文化、慈済人文、ボランティア奉仕、文化などの講座が設けられた。カンボジア中国人理</p>                                   |

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・17 | <p>08・10</p> <p>◎慈済マレーシア・セランゴール支部はサバ州のケニンゴー病院の人工透析センター拡張工事を支援することになり、本日、その起工式が行われた。</p> <p>◎インドネシア慈済人医会は骨髄寄贈を広めるために、ジャカルタ支部で医療人員と一般大衆向けにそれぞれ、座談会を設け、花蓮慈済病院の医師が専門知識を語った。医療人員の座談会では「骨髄移植への挑戦とチャンス」が主題で、330人が参加し、一般大衆の座談会には201人が参加した。</p> <p>台湾、シンガポール、フィリピン、タイ、香港、フランス、インドネシア、ラオス及びカナダの慈済人医会メンバーとボランテイア101人が17日から19日までラオス・パクソン県立病院とチャンパサク省立病院及びアタポー省立病院で施療を行い、3105人に奉仕した。</p> |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・06 | <p>事会とウドン・チファ公立学校、バタムバン・レンファ公立学校から70人が参加した。</p> <p>◎慈済科技大学は5日から16日まで「2019奉仕して学ぶ・人文と他文化講座」を開き、フィリピン・メダンシニア大学、韓国京福大学、日本愛知学院大学、大阪大学、中国江南大学などから25人の教師と学生が参加した。</p> <p>シエラレオーネ共和国の首都フリータウンで2日、連日の豪雨による水害が発生した。慈済基金会とカリタス・フリータウン及びヒーリー基金会は共同で6日と7日にスーザンズベイとカルバートで被災者に米と毛布などの物資を配付した。8月中旬にも再び被害の報告があり、慈済は米を提供すると共に、ランイ基金会と協力して炊き出しを行った。</p> |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



|       |                                                                                                                                                                                           |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・26 | <p>慈済ニューヨーク支部の蘇煜升（スーユスン）執行長がアメリカン・チャイニーズ環境保全協会（ACEPA）の「永続的な環境保全・プラスチック削減」年次総会に招かれ、慈済の回収プラスチックから再製された衣料品やランチボックス及びその他の製品の製造過程に関する報告を行った。</p>                                               |
| 08・23 | <p>第68回国連民間組織大会（UN Civil Society Conference）が26日から28日までアメリカ・ユタ州ソルトレイクシティで開催された。慈済基金会からは14人が参加して他の団体と交流した他、関連会議にも出席し、サイクロン・イダイと台湾九二一地震を主題にした「安心して生活できるように」という異宗教間の支援と被災後の復旧計画について報告した。</p> |

|       |                                                                                                                                |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・22 | <p>花蓮慈済病院はフィリピンマニラ慈済眼科センターと共同で「ハイレベル細胞治療論壇」を催し、両国の細胞治療専門家が幹細胞研究の現状と再生医学、幹細胞及び神経損傷症例の臨床試験成果と発展予想に関して報告し、100人以上の専門分野の人が集まった。</p> |
| 08・20 | <p>慈済基金会はラオス・チャンパサク省立病院支援で、3月中旬の病床寄贈に続いて、本日、更に110床の病床と220基の点滴スタンドを寄贈して病床不足の解消を後押しした。</p>                                       |
| 08・19 | <p>慈済基金会は新北市管轄の29の区役所と消防署の7つの救援チーム、特捜チームの防災及び救済用に400床のジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）を市政府消防署に寄贈した。</p>                                    |

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業中心 (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## 花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825  
玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718  
関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880  
大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000  
台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779  
台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666  
大林慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路2段248号  
TEL: 886-5-5372000

## 慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)  
231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770  
慈済人文志業センター  
112 台北市立德路 2 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989999  
静思人文  
TEL: 886-2-28989888

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ハワイ支部 (Honolulu)  
TEL: 1-808-7378885

## カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali  
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo  
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo  
TEL: 55-11-55394091

イギリス London  
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris  
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg  
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam  
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg  
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna  
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng  
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州  
TEL: 86-512-80990980

## 香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila  
TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok  
TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh  
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon  
TEL: 95-1-541494

マレーシア  
Penang  
TEL: 604-2281013  
Malaka  
TEL: 606-2810818

シンガポール  
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta  
TEL: 62-21-5055999  
大愛テレビ局  
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota  
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman  
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul  
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney  
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド  
Auckland  
TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2019年9月18日発行・273号  
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄  
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・王麗雪

校閲 黒川章子

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



## 人生の冬

南アフリカは真冬で、首都のプレトリア市郊外にあるモーイプランス地区のトタン屋根居住区では、一家7人が慈済の冬季配付物資でこの先1カ月半必要とする白米を受け取っていた。

ゴミ山に隣接しているトタン屋根居住区には水も電気も通っていない。殆どの住民はゴミの中からまだ使える物を見つけ、それを売って生計を立てている。慈済は5年前からケアと配付を始めた。今年は合計1851世帯に白米、靴、衣類などを提供した。

(文、撮影・蔡凱帆 プレトリア市 2019.7.7)



慈済ものがたり